
地球上の異世界

rouge

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地球上の異世界

【Nコード】

N5511D

【作者名】

rouge

【あらすじ】

いつもと変わらない日常を送っていた竜と祐樹。しかし、彼らを持つ特別な力のせいで、地球の歪にできた空間で生活することとなる。クエストをこなしながら、世界破壊を目論むベインの陰謀を阻止しようと立ち向かう。

すべての序章

僕は海が何より嫌いだ…

それは僕が、僕の不思議な力を物語っているようだから…

僕は神田竜。
かんだりゅう

ごく普通のありきたりな人生を歩んでいる。

ある一点を除いて…

「おーい竜っ！」

朝一で声をかけてきたのはクラスメートの半田祐樹。
はんだゆうき

こいつは口数の少ないオレに唯一話しかけてくるやつだ。

「昨日のテストどうだったっ！？」

いつも通りうつとうしいテンションで話しかけてくる。

「別に。」

「何それ！朝からそんなんじゃ一日は始まらないよ！」

はあ…

仕方なくいつもの場所へ向かうとする。

いつもの場所というのは僕たちが「基地」と呼んでいるところだ。

基地といってもたいした場所ではない。むしろ基地という表現は間違っている。

ただの教室だ。といっても普通の人では入ることができないような使われていない鍵のかかった教室だ。

「はやくしてねっ」

「はいはい…」

もちろん僕は鍵など持っていない。

（職員室から借りてくる勇気があればもっと社交的だろう。）

ではどう開けるのだった？

僕にはなぜか特別な力がある。物心ついたころには使えるようになっていた。

神に愛されてなのか、神に嫌われてなのかはわからない。僕が思うには嫌われてだと思うが…

開けるという言葉には少々結びつきにくいと思うが、僕の特別な力とは「消す」ということだ。

消すと一概に言っても僕には使い方がいまいちわからない。というかあまり使いたくない。

なぜかって？消すということはその気になれば人でさえ消すことができる。

そんな恐ろしい力を僕が持っているとなるとみんなが知ったらどうなるだろうか…

考えただけでも恐ろしい……少し話がそれてしまったね。

さて、消すというのがなぜ扉を開けるのにつながるか。

「はやくしてって！先生来るよ！」

祐樹がせかすので手短にしよう。

僕と祐樹の存在を一時的に消すのだ。

手を祐樹と僕にかざす。

僕たちはもうほぼ色だけになった。

一時的に消すことで扉は僕たちを認識せず（もちろん扉には自我はないわけだが）とおりぬけるということだ。

かなり非科学的かつ理解不能だがその辺は勘弁してほしい。

僕だってどうしてこうなるかわからない。

どうにかして自分に納得のいく説明をしようと思ったたらその考えに至った。

まあこんな力どうでもいいんだけどね。

基地へ入ると僕たちの体は元に戻っていく。

「ふう…何度やってもなれないや」

「こんなこと普通じゃありえないしな」

そうだ肝心なことを忘れていた。

なぜ祐樹が僕の力を知っているかということだ。それは簡単。彼も不思議な力の持ち主だからだ。

しかし今は関係ないので伏せておこう。

ここの教室は使われていない上にたくさんのものが大量におかれているため僕たちがいることはベランダの窓からはおろか、廊下側のドアにつけられた小窓からさえ見えない。

そのためこの教室は僕たちがほぼ私物化している。

祐樹はゲーム、漫画、勉強道具などを持ち込んでいる。

（ここにいるということは言うまでもないが、授業をサボっているわけだが勉強道具を持ちこむのはなぜだろう…）

それにくらべ僕はノートパソコン一台のみ。

素っ気無いようだが案外暇つぶしにはなる。

「なんか楽しいことないかなあ。」

祐樹がつぶやく。

「お前は毎日が楽しいだろ。」

「うん！」

即答で返ってくる返事。

祐樹は気楽でいいよ…

PCをカチャカチャやっていると掲示板があつた。

特に興味をそそられたわけではないのだがなんとなくクリックしてみる。

いくつかのスレッドを見ていると不思議なものが目に入った。

「あなたの潜在能力はなんですか？だつて！」

突然祐樹の声がして驚いて振り返ると後ろから祐樹が覗き込んでいた。

「これって僕たちの力のことじゃないのっ？」

ふざけた感じで話しかけてくる祐樹が勝手にクリック。

するといきなり画面が真っ暗になっているんなウィンドウが開いたり閉じたり警告の表示が出っぱなしになったり…終いにはフリーズしてしまった。

「あらら……」

「これ何かわかるか祐樹くん？」

妙に優しい口調で問いかける。

「えっと…ウイルス…？」

「ざっつらいとだよ…」

この後は言うまでもない。

「つたく…」

「いつてえ…竜パンチ強すぎ…」

「何か言ったか？」

「何でもございません…」

PCどうするんだよと思いつつも、もう一度電源を入れてみる。

なんとPCが直ってる！んなわけないだろ…と一人で心の中でノリ突っ込みを入れてみる。

やはりダメだ。

もう一度…ダメだ。

あきらめようと思ったとき突然PCがついた。

「え！？」

「僕の力忘れたの？」

少し驚愕する僕に珍しく落ち着いた口調で祐樹が話しかけてくる。

そうか…

祐樹の力は電気だ。

こいつもオレと同じように危ない力だが、使おうと思えば簡単に制御できる（らしい）。

「どうしてPCが直ったのでしょうか？」

祐樹が自慢げに聞いてくる。悔しいながらも返答する。

「祐樹が電気をPCに送り込んでウイルスだけを指定して除去したんだろ。」

「ざっつらいとだよ。ざっつらいとって言葉悪くないね。今度使ってみるよ。」

嫌味のように繰り返す祐樹。

元をただせば祐樹、お前のせいだぞ。

心の中で愚痴をこぼすのが（聞こえるはずがないが）聞こえたのか

祐樹が言う。

「PC壊しかけたのは悪かったよ。ごめん…でもさっきのスレッド変だったよ。」

「さっきのスレッドがなんだって言うん…」
なにかおかしい。

「祐樹、なにか静かすぎないか？」

「そう思う。」

「さっきのスレッドに今みたいになるように仕掛けがされてたってことか…」

「多分そう。」

なんでこいつはいつもうるさいのにこいつう時はこんなにも静かなんだ？

「といつかなんか暗くなってきたくないか？」

「いや、もうここの教室以外は暗黒と呼べる状態になってるよ」
後ろを振り返ったがもう遅い。

この教室も暗黒に染まった。

「何が起こってるんだ？」

「わからない。」

そりゃそうだろうな。

「でも竜！……なんだかわくわくしないか！？」

「たく…」
という状況かもわからないのにわくわくとはぬかしたやつだと思つづくと思う。

「どういう状況かわかってるのか？」

「全然。」

ふざけるな！という思いは声にはだせずに呆れ返ってしまった。

すべての序章（後書き）

大切なお時間を使い、最後までご朗読してくださり本当に有難うございました。

ギルドと闇ギルド

あれから何分たっただろうか。
依然として暗黒は続いている。

いろいろと調べたり、祐樹と話し合って今がどのような状況下か考えてみた。

わかっている事

- ・ここはさつきまでいた場所ではない
- ・暗黒とはいってもなぜか目に見える
- ・僕たち以外の人はいないようだ（あまりにも静か過ぎる）
- ・祐樹はこの状況を楽しんでいる

一つ目の項目は周りを見渡せば一目瞭然だ。
壁がなくなり、代わりに永遠といっても良いような長い道のりが続いている。

二つ目の項目はよくわからない。
四つ目の項目は無視してもよいのだがあえて入れてみた。僕の怒りを受け取ってほしい。
そしてもう一つ…きつと僕の予想が正しければ僕たち以外にも不思議な力の使い手がいる…

「これからどうする？」

「まずここから動こうよ！」

ピクニックにでもきたのなら僕だってそうしたい。

「方向もわからずに動くのは危険だ。」

言っではみたものの他に考えが浮かばない。

そのとき背後から物音がした。

「誰だ！？」

「かわいそうに…闇に飲まれてしまったのか」

祐樹をかばいながら一歩後ずさりする。

「闇とは…このことか？」

おそろおそろ聞いてみる。

「竜？誰と話してるの？」

何を言ってるんだコイツは…

目の前にいるいかにも怪しげな人が見えないのか！？

「ふざけるのもいい加減にしろ！」

「ふざけてなんかいいよ！」

え…？

「そう…私は君の頭の中に直接入り込ませてもらっている。そして君とこうやってはなしをしている。」

何なんだこいつは…。

「私はベイン。闇ギルドの長。君たちの目はどう考えてもここにふさわしい目とはいえない。たまたま私が通ったところに歪が生じ、迷い込んだというところだろう。」

「なぜ…僕だけに話しかける？」

「何！？そんなこともわからんのか？どう考えても話が通じそうなのはお前しかいなかろう。」

ああ…ベインの言うことに大賛成だ。

「僕だけってなんのことだよ！」

まだ喚いている祐樹に言う。

「ゴメン…よくわからない…少しほうっておいて。」

そういうとすねたようにしゃがみ込んでしまった。

「まあ君たちはまだ世界を何も知っちゃいない。それに私は今ばかり機嫌が良い。いつもなら…いや、また会えたら会おう。」

「うわっ！」

「なんだ！？」

突然まばゆい光に包まれた。

と思っただらもといった場所に戻っていた。

「なんだっただ？」

「わからない…」

「それより竜…頭大丈夫??」

一瞬ぶん殴ってやろうと思ったが祐樹にはさっきのことは見えてなかったらしいので仕方がない。

「ああ。大丈夫……」

おいおい…やめてくれよ…

心の中で願いつつ祐樹に尋ねる。

「何かおかしくないか?」

「また!?!」

もとの基地に戻ったと思ったたらまただ。静かすぎる。

「今度は何色だ…?」

窓にかけていった祐樹に不安MAXで聞く。

「純白だ…。」

もうすでに窓を通り越して基地に入ってきている。

数秒後、一点を除いた同じ世界が広がった。純白という一点を…。

「まったく…なんなんだ。」

「今日はすつつつつごい楽しい日だね!!」

なんて能天気なやつだ。

今、横を風が通った気がした。

「今、風吹かなかった?」

「僕もそう思う。」

久しぶりにまともな会話が成立したような気がする。(気のせいかな…)

「あら。やっぱり術者さんだったのね。」

またかよ…と思う前に体を身構える。

「そんなに硬くならなくていいわ。私はアリス。ギルドの長よ。」

少し長い髪の女の人が立っている。多分世間一般で言う美人という人だろう。

「ここはどこ??」

今回は祐樹も見えるらしい。

「ここは私のつくり出した空間よ。Aワールドって言うの。ここに入ってくるからには君たちは術者でしょう？」

「術者とはなんのことです？」

「とぼけても無駄よ。その笑顔に満ち溢れている子と君のことよ。特に君は不思議な力を持つてるわね。」

笑顔に満ち溢れている？

隣を見るとまるで天国の極楽浄土を信じてよかったと言わんばかりの表情をした祐樹がいた。

こんな状況で…とは思ったがまあいい。これからは気にせずいこう。

「まったく話が見えてこないんですが…」

「僕はわかったよ！ずばり君は良い人だ！」

確かにそうだろうが……絶える僕。

「そうね。私は少なくともあなたたちに危害を与えることはないわ。こんなところで話すのはなんだからちよつと場所を移しましょ。」

そういった次の瞬間、僕と祐樹は消えた。

ギルドと闇ギルド（後書き）

連載2話目です。読んでいただき、本当にありがとうございます。
これからもよろしくお願いします。

到着した場所

「よっしゃー！B級クエスト達成したぜ！」

おお！歓声があがっている。

みなおめでとう、頼もしいな！などと言った声をかけている。

「よくやったな。ブラン。」

「アリス！これからもどんどん頼んでくれよ！」

その後歓喜に飲まれてブランと呼ばれる男は別の部屋へ行ってしまった。

「さて…話の続きをしましょう。」

さてって…ここはどこだ！

明らかに日本ではないだろう。

「ここってどこ！？パラレルワールド？？」

「何言ってるの？ここはあなたたちのいた日本よ。」

なんだ日本か…じゃない！

「嘘だ！こんなありきたりな洋画にでも出てきそうな場所は日本なはずがない！」

そうだ。こんなギルドを連想させるようなところは…ギルド？

そういえばアリスもベインもそんなようなこと言っていたな。

「ホントに日本の空間の歪に作られたギルドよ。」

「ギルド？ギルドってなに！？」

祐樹も少しは正気になったようだ。

「私がこれから順を追って説明していくわ。だから少し黙っててね。」

僕たちは説教をされる生徒のごとく黙り込んだ。

するとあまりにもいろいろなことがありすぎたこともあってか体に力が入らなくなってしまった。

「まず、あなたたちはきつと空間に歪を生み出すようなことをした。それが原因となりこの空間に飲み込まれてしまったの。ここまでのい

い？」

空間に歪？あのスレッドのせいかな。祐樹はすかさず聞く。

「あの…いいですか？」

「いいわよ。」

「空間に飲み込まれるって闇…ギルドとか言うのも関係あるんですか？」

「やっぱり…あなたたちBワールドに入ったわね。」

Bワールド？聞こうと思ったがその前に教えてくれた。

「Bワールドって言うのはベインのつくり出した空間。でも私のつくり出すのはAワールド。AワールドやBワールドに迷い込む人は基本的に術者なんだけど、Bワールドに入っていくのはとても悪い人たちの…最終的には世界破壊を目論んでいるらしいわ。それを阻止するべく集まった集団が私たちよ。私たちのような術者は普通の生活をするのはむずかしいわ。だから裏の仕事を切り扱っているの。だから仕事を受注してこなし生活しているからここはギルドと呼ばれているの。」

なんとなくわかった気がするが…

「術者って言うのは…僕たちのように不思議な力を使う人たちのことですか？」

「ん…」

少し考え込むアリス。

「まあ簡単に言えばそうね。でも自分たちだけがその力を持っているという考えはよくないわ。術者というのは自分のなかの潜在能力を引き出した人のことを言うの。だからみんな能力はそれぞれあるのよ。その力が感情や経験を引き金として表面上にでてきたときに術者となってしまうのよ…」

なんだか悲しそうにアリスは話した。

なってしまう…と言うことはアリスはなりたくなかったのだろうか…神をうらんでいるのだろうか。

「どんな術者がいるんですか？」

祐樹がいることを思い出し、はっとする。

「基本的な力の火、水、風、雷の四種類の属性を使う人が圧倒的に多いわね。でも雷はとても珍しいわ。あと、この四つに属さないものを無というんだけどこちらは雷よりもっと数は少ないの。あと、光と闇って言う大部分に分かれる能力のコアがあるんだけど、このギルドに入っている人たちはみんな光よ。」

無？僕は無に入るのか…

「無の中にはいろんな能力の人がいるのよ。」

後ろからいきなり声をかけられ、びっくりしていすから落ちてしまった。

「ははっ！新人さん？私はクランよ。」

見ると僕たちと同じくらいのかわいい女の子がいた。（正直タイプだ）

背はちよつと低くて髪は金髪で目は綺麗な蒼だ。

突如、祐樹が豹変した。

「僕は祐樹。ここでドジってるやつは竜。僕の友達さ。」

こんな祐樹は初めてだ…祐樹ってこんなじゃないと思っていた。

正直気持ち悪い…

「あら。あなたたち私のこと気に入ってくれたみたいね。ありがとう

！これからよろしくね。」

え…確かにかわいいとは思ったが口に出してはいないぞ…

「あ…ちよつと…」

行ってしまった。

「クランは竜と同じ無の属性の術者なのよ。あの子はその気になれば他人の心を読むことができるの。」

そうだったのか…

「じゃあさ！アリスさん！あそこのあの子は！？」

見ると金髪の同じく僕たちと同じくらい女の子がいた。（タイプではないがきれいだ。）

「アリスでいいわ。あの子はヘレンよ。アリスとタッグを組んでる

の。タッグを組むと特に仲の良い人同士が協力して仕事をこなせるのよ。ただ、あまり人数が多いと目立つし危険だから特別な時以外は2人で組むもののなの。」

へえ。難しいな。

そのとき、後ろからとても絶大な視線を感じた…

きっと僕はあとで思うんだ…あの時振り向かなければよかったと…

「竜！タッグを組もう！」

「やだ。」

即答する僕。

「あなたたちはタッグを組むといいわよ。雷と無は非常に相性がいから。現にヘレンも雷の属性の術者よ。」

もう一度嫌だと言おうと思った瞬間、遅かった…

「決まりー！改めてよろしくな！竜っ！」

祐樹、なんだかさつきよりうれしそうじゃないか？

はあ…人生悪いことばかりじゃないと言うが悪いことばかりじゃないことはないんだなあとつくづく思う。

「はいはい。」

人生前向きに、という言葉もあるんだしまあいいか。

「じゃああなたたちは1134室を使つて。シャワー、トイレ、キッチン、ほぼなんでもあるから。わからないことがあったら何でも聞いてね。」

部屋はいくつあるんだとは思ってたがさすがにこれだけのことが起こつたらもう驚かない…とか思っていたら祐樹はもうすでに走っていつてしまった。

しかしまだ僕は聞かなければならないことがある。

「あの！一ついいですか？」

「あら。まだ何か聞き足りないの？」

「はい…僕たちは学校の途中でここにきてしまったんです。向こうはどうなつたんですか？」

アリスは悲しそうな顔をしていった。

「さつきも話したでしょ…術者となった時点で…正確にはここへ来た時点でもう元の生活には戻ることはできない。向こうの世界は動き続けているわ。でもあなたたちは向こうの世界にはいなかったことになる。あなたの力のように存在を消すのよ…いや、ごめんなさい。あなたの力のようにではないわね。」

「え？それってどういうことですか？」

「力についてはまた今度詳しくね、今日はゆっくり休んで。おやすみなさい。」

壁についた窓はもう黒になっていた。

そうだ。祐樹もすでに部屋にいつてることだし今日はゆっくりと寝よう。

到着した場所（後書き）

第三話目です。次回は力について詳しく説明しようと思います。これからよろしく願います。

それぞれの夜（前書き）

スイマセン。

前作のあとがきで力の使い方を詳しく説明するといいましたが、どうしても書きたいことがあったので力の使い方は次回にまわします。今回は情景描写に気をつけて書いてみました。

伏線も入れてみたので探してみてください。

それぞれの夜

部屋はどこだ？と探していたら祐樹を見つけた。
祐樹も探しているようだ。

「どこに部屋があるんだ？」

「僕もさっきから探してるんだよ。」

祐樹は早く部屋に入りたいようだ。

1133室の隣には部屋がない…と想像していたら急に扉が現れた。

「ここかあ！」

祐樹は何の不安も感じずに部屋へ入った。

少しは用心しろよと思いつながらとりあえず中へ入る。

部屋に入ると祐樹はいつにも増してはしゃいでいる。

部屋の中はさらに2つに部屋が分かれていた。よかった、とほっと胸をなでおろす。

「アリスの空間の中でも天気ってあるんだね！」

外は雨が降っているようだった。

僕は楽しそうな祐樹をことごとく無視し、シャワーを浴びてパジャマに着替るなりすぐベッドに入った。

「もう…戻れないんだよな。」

一人つぶやく。

今考えてみると、他愛のない、ホントに素っ気なくて味気ない毎日だったけど、必死に勉強して、必死に考えて、必死にいろんな行事に参加して…悪くなかったかもしれない。

馬鹿やって、笑いこけて、先生に反抗する友達見て、何やってんだと思いつながら他ものやつらと一緒に楽しく笑って…

あんな毎日はまだ戻ってこない。

そう考えたら自然と涙が頬を伝った…

あまりにも突然のことで頭が回らなかった。

でも落ち着いて考えてみると涙があふれてきた。

しかも学校のみんなはオレと祐樹のことは何にも覚えてないんだっ
たな。

でも急に消えたってことになるよりマシか…

祐樹もきつと同じ心境だろう。明日からは共にやっていくんだ。

泣いてなんかいられない！

今日はいろいろありすぎた。ゆっくり寝よう。

「ちえつ。竜ってノリ悪いなあ。」

さっさと寝ちゃうし…

僕なんかきつと興奮して寝られないよ。

竜はわくわくしないのかな？

僕はこれからが楽しみで仕方ない！

学校のみんなと会えないのはつらいけどみんなも僕のこととは忘れて

るんだし、僕も早く忘れよう！

ここの生活にも慣れていけないと。

それにしてもヘレンって子かわいかったな。

いつか声をかけてみよう。

時計を見ようと思い、見渡したが、見当たらない。

これだけの設備だから小さいところには目が向かないのかも。

そう思いながらベッドへ向かう。

明日から仕事…あのブランって男の人クエストとか言ってたな。

仕事…クエストってことかな？

明日からクエスト頑張るぞ！

そのためにも今日は早く寝よう。

ふう…新人がまた来たわね。

私今まで1134部屋もよく作ったわねえ…

自分の力に少し自身を持つ。

やっぱりたくさんの人たちがこのギルドに入ってたけど何人入っても、もとの生活に戻れないと言ったときの罪悪感はいわね…窓の外は雨が降り続いている。

だめね…やっぱり私の出す空間は感情に左右されてしまう。

まだベインの空間には及ばない…もっと力をつけなくちゃ。

そしてあの子たちには力の使い方を教えてあげないと。

もしかしたらエノやノワールたちを凌ぐ強さとなるかもしれない。

そうすればベインの陰謀を止めることに近づくわ。

明日は快晴ね。

外を見ると雨はしだいに弱まりつつあった。

それぞれの夜（後書き）

第四話目です。

やっとう話目です。（笑）

いつも読んでくださっている方、初めて読んでくださったかた、ホントは他の作品探してたのに間違えてここきちゃった！というかた、読んでいただき、ありがとうございます。

次回こそ力について書くのでよろしくお願いします。

力の使い方（前書き）

遅れてスイマセン。

今回はちょっと凝ってみました。

力の使い方

朝（？）目覚めると外は雨が止んでいたが依然として真っ白だ。なんだかもやもやしたような、くすぐったいような気分を感じる。僕は朝食を食べようと思ったが、腹が減っていない。

まあ精神的に厳しいし仕方ないか。

祐樹を起こしに行こうと祐樹の部屋に入ったが、祐樹はいない。

あいつは確か低血圧だったと思ったけど。もしかして僕が寝すぎたかな。

時計を見渡したが…ない。

気にせずに祐樹を探す。

やっぱりいない。

先にどこか行ったのだろうと思ってはじめに連れてこられた本部のようなどころへ行く。

そこで祐樹が食事をしていた。

「早いな祐樹。」

「竜が遅いんだよ！」

「時間わかんないんだからしょうがないだろう。」

「あー…時計ないよね。何でだろ。」

話しているとき机の上を見るとすごい量の食べ物残渣らしきものがあつた。

「これ…全部1人で食べたの？」

「うん。なんでか分からないけど朝起きて腹が減ってないと思ったけど一応何か食べとこと思って。そしたらなんかその料理人がたくさん運んでくれるんだよ！しかも全然腹いっぱいにならないんだよねえ。」

腹が減らないのは祐樹もか…というかちょっと待て…どこの国でも、どの時代でも無料で快適な空間を作り出してくれる世はないぞ。

「祐樹…その料理人すっごい笑顔だっただろ？」

「え！？よく分かったね！なんで？」

はあ…コイツは世の中を知らなさすぎる。

一応祐樹に世の中について話してやった。

「え！？じゃあお金いるの！？僕持ってないよ！」

祐樹の声があまりにも大きかった。

すぐく大柄な黒人の料理人がすごい形相で出てきて祐樹をつかんだかと思うと……以下略（笑）

今度絶対に払うと約束して死人のような祐樹が席に戻ったとき、アリスが来た。

「おはよ祐樹、竜。」

「おはようございます。あの…いくつか聞きたいことがあるんですが…」

「分かってるわよ。朝克蘭にあなたたちの心の中を探ってもらったの。だから目覚めが悪かったでしょ。」

ああ…もやもやした気分はそれのせいだったのか。

向こうのほうにいる克蘭がこっちを見て笑顔で手をふってくれた手を振りつつもやっぱり普通の女の子じゃないんだと心の片隅においておく。

浮気とか絶対できないね。（いいさいいさ！どうせ僕にはこれから先ずつと縁のないことだからね！）

「じゃあ手短にあなたたちの聞きたい事を答えてそのあとで力について話すわ。まずここの空間について説明が足りなかったみたいねあなたたち朝起きてからおなか減ってないでしょ。ここの空間にいるときはおなか絶対空かないのよ。でも満腹にもならない。だからここでの食事は大人で言うタバコやお酒みたいなもの。楽しむためにあるのよ。」

「もつと…もつと早く言っただけだった…」

ボソッとつぶやいた祐樹。つくづく気の毒だ。

「でも楽しむためにはお金が必要よ。だからクエストでお金を稼ぐの。クエストってものは仕事と考えて結構よ。ここは空間のなかだ

けど時間の流れは外と変わらないわ。でもこの空間は私のものだから朝とか昼とか夜とか時間はないわ。ただ見かけ上だけ明るかったり暗かったりはするわよ。クエストを受注したときはクエストボードってところから受注して、私に渡して手続きをすませばいいの。そのクエストボードは外が昼の時は白、夜は黒になってるから昼間しかできないクエストは白のときに行くってわけ。クエストでお金を稼いだらものを買ったり今まであなたたちが外の世界で使ってたみたいに使えるわ。」

ここで皆さんに質問だ。

祐樹の目の色はどこで変わったのでしょうか。

もちろん答えは決まっている。

<お金>と言うことばが出たときだ。

そしてアリスが話し終えるころには<竜！早くクエストへ行こう！>っていいだしそうな輝きに満ちた目でこっちを見ている。

「竜！クエストへ行こう！」

ほらね…

「まあいいけど報酬金は割り勘だからな。」

「ダメよ。まだ。力の使い方を覚えてからじゃないと。それにクエストって言ってもはじめはタダ同然の金額ではじめるのよ。そしてどんどん強くなって力をつけて名を轟かせるようになってようやくクエストの依頼がくるようになるの。簡単なクエストからD、C、B、A、S、Hとランクがついてるわ。何にしてもはじめは無名からはじめないと。」

祐樹の顔が青ざめてさっきよりひどくなったのは言うまでも…いや、そうでもない。

「じゃあ早く強くなればいいんだろ！竜！頑張ろっ！」

「ただ前向きなんだよ…」

「おう。」

一応相槌を打っておく。もう一つ聞きたいことが…

「あの…いまさらなんだけどアリスも他のみんなも日本語お上手で

すね。」

「何言ってるの。あなたたちのほうが英語上手じゃない。」

は…？きょんとした顔で祐樹と見合わせるとアリスが笑い始めた。
「あははっ。冗談よ。ここのギルドの人で電気を操る人がいるの。」

その人がここの空間に自分の術をかけたの。その人は本当にすごい人でここの空間にいる人全員の脳内の電気信号の、得に言葉の部分だけをいじってみな理解できる言葉になるようにしたのよ。あなたにとってはみんな日本語を話しているように、私にとってはみんな英語を話しているように感じさせるってこと。」

なぜか懐かしいことを話しているような口ぶりだった。

横では祐樹がいつそう目をきらきらさせていた。

「その人電気を使うんですか！？じゃあ僕もその人みたいになりたい！その人はどういう人なんですか！？」

「スパルっていうんだけど…それより力について説明するから外行くわよ！」

よし！と思って立ち上がったらもう外だった。相変わらず何もなし。

「何だこれ！？」

祐樹が声を裏返して驚く。

「ああ…はじめあなたたちをギルドの中に入れたときも使ったですよ。この空間の中では私は好きなように動けるのよ。」

すぐくうらやましい…

「さて、力についての説明をしますか。」

今回ばかりは僕もかなりわくわくしている。

「前も言ったと思うけど力は火、水、風、雷に分かれるわ。ちなみにここの空間でもB空間でも光って力のコアはすぐく役に立つの。暗闇で光を持つ人は目が見えなくなることはないの。心の目、心眼って感じのものが使えるのよ。」

あーだからBワールドに入ったとき目が見えたのか。

「術にも属性が同じようにあるわ。術と自分の属性が一致したほうがより強い術がだせるの。私は無と風の属性を持つてるから空間を

操る異の術と風を操る術をたくさん身につけてるわ。でも他の属性の術も少しは使えるの。属性が違う分威力は落ちるけどね。」

へー無と風かあ。ん？異と風？

「自分の属性ついていくつあるんですか？」

「人によつて代わるけど使いやすい順位はあるわ。」

「じゃあ僕は雷以外に何かありますか！？」

すごい迫力で話しかける。相当興奮しているのだろう。

「ええつと…ちよつと待ってね。」

アリスが消えた。1秒…2秒…3…4…

「ゴメンね！この水晶ないと分からないから。」

お早いお帰りで。

「この水晶を手の上にのせて。」

言われたままに手の上に乗せる祐樹。

すると突然祐樹はまばゆい黄色い光に包まれた。

「うわーきれいつ！」

祐樹が感嘆をあげる。

「ホントすごい…」

僕まで感動されてしまう。

「祐樹：あなたすごい珍しいわね。珍しい雷のなかでこれだけ純粋な雷はめったにないわ。まず他の属性の術はまったく使えないでしょうね。でも雷の術はきつと普通の術者の2倍から3倍はあると思うわ…。」

褒められて嬉しそうな祐樹。少し嫉妬してしまう。

「次はあなたね。竜は少し誤解してるからきつと驚くわよ。」

アリスはそういうとにつこりしながら手を突き出した。

そついや昨日も言ってたな。よく意味は分からないが水晶を手のひらに乗せてみる。

すると祐樹のときと同じように…はならなかった。

突如、僕の周りに数え切れないほどのサイコロのような小さいものが現れ、ものすごいスピードで動きだした。

「何これ!？」

その立方体は順調に速度を上げながら上へ上へとあがっていき、竜巻のようになつた。

僕の視界はそれしか見えない。外がまったく見えない。

それはだんだんスピードを緩め、終いには僕の周りを漂うだけのミクロほどの四角となつた。

ミクロというのはおかしな表現だが、簡単に言うと色しか見えないということだ。

色は…色だけにいろいろ？

「すっげー竜!虹のベールか!？」

「わかんない…」

茶化す祐樹をさらつとかわす。

「アリス…これって？」

「あなたは自分の力が何かわかつていなかったようね。初め、あなたはく消す>という力だと思つてたでしょ?違う?」

「そうですね…違うんですか?」

戸惑いを隠せない…

「これを見てもまだ分からないの!?!この無数の漂っているのは原子よ。あなたの力は消すことじゃないわ。分解し、造り出すことなのよ。分かる?」

「でも…僕たちは鍵のかかつていない部屋とかに入れたんですよ!僕たちの存在を消して壁に認識させないようにして中に入っただけです。」

「それは大間違いよ竜。あなたはあなたと祐樹の細胞一つ一つを原子として分解して、部屋の中で再構築しただけよ。そもそも私たちの存在を消したところであなたが消えるのは人の記憶の中からだけなのよ。たとえ存在が消えても壁にぶつかるわ。当たり前じゃない。」

確かに……

「異の属性は未知なのよ!書物などに記されている術は使えないけ

ど自分でオリジナルの術を使うことができるの。すばらしいと思わない!？」

そうだ…消すことじゃない、造ることができる…
わくわくは始めの何倍もに膨らんだ。

「それに…」

アリスが何かつぶやいた気がした。

「じゃあそろそろ力の使い方を覚えましょう。そうね…やっぱり術を覚えるのは体で覚えるのが一番ね。私は術のなかで一番シンクロしない雷の術しか使わないから。私に一発でも攻撃を与えたらそこで終了。三十分で空が青くなるようにするから真っ青になるまでに私に攻撃を与えることができなかったらあなたたちの負けよ。ちなみに負けても何もないとか思わないでね。男の子が女の子に負けるなんて恥なんだから。」

そのとおりだ。絶対勝つぞ!

「勝つぞ!祐樹!」

「当たり前じゃん!頑張ろうぜ!」

「始めるわよ!よい……スタート!」

力の使い方（後書き）

最後まで読んでくれて有難うございました。

次回予定ではお待ちかねの戦いが入ると思うので楽しみにしていただけたら嬉しいです。

非力

アリスは開始の合図と同時に何かぶつぶつ言いながら僕たちと反対方向へ走っていった。

「ホントに空間移動の術とか使わないんだなあ……」

「竜！そんなこと言ってる場合じゃないって！ぶつぶつ言ってたのは多分、術を発動するための呪文か何かだよ！逃げよ！」

そのとおりだと思うがホントピンチになると頭の回転が速くなるなあ……羨ましいぞ。

祐樹は後ろに逃げようとする。

「待て！逃げるよりも追いかけたほうがいいんじゃないか！？どうせ捕まるのがオチだろ！」

「確かにそうだ……追いかけるよ！」

アリスに向かって2人で追いかける。

「なあ！二人一緒だと危なくないか？」

「それより空に雲みたいなのが出てきたよ！まずいんじゃない！？」

祐樹はオレの意見を見事にかわした。

しかし祐樹の意見のほうが大切だったようだ。

雲はみるみるうちに上一面を覆いつくした。

「逃げ道はないってか……」

「まずはウォーミングアップよ！」

アリスがそういった気がした。

次の瞬間、とてつもない量の雷が嵐の如く襲い掛かってきた。

雷が落ちた場所はまるで隕石が落下したあとのように真っ黒になり、空間が修復されてもとに戻る。

「おい！シンクロが一番しにくいって言うことは一番弱い業ってことじゃないのか！？」

「アリスはギルドの長だよ！強いに決まってる！早くばらばらになっ

って逃げるんだ！」

祐樹がいろんな方向へ走り回る。

僕もすぐさま雷を避けようとするが、さすがに避け続けているわけにはいかない。

かといってここは雷を防ぐようなものは何もない…

待てよ…僕の力は消すことじゃないんだ。創り出すことなんだ！

「祐樹！こつちへ来い！」

「固まったら集中して狙われるだけだよ！」

「いいから！」

祐樹が僕のもとへ来た。

僕はすぐに地面を原子に分解するように手を地面にかざしてその手を周りに振る。

原子たちはすぐに形となり、僕と祐樹が入れる小さなドームができた。

「すげー…ナイス竜！」

「早く中に！」

アリスはまだかなり向こうにいる。

「自分の力を早速使ってみたわね。せいぜい頑張つてよ。珍しい術者さんたち。」

中に入るとほつとして力が抜け、へなへなと座り込んでしまった。

「まだ戦闘中だよ！」

分かっているが…力を使うのは少し疲れる。慣れるまではあまりむやみに使えないな…

ふう…一応立ち上がった壁にもたれかかった。

「ここからどうするの？」

「ん…」

外は依然として雷が降り続いている。

「早くあの雲をどけないと時間すらわからないよ。」

祐樹の言つとおりだ。

「あの雲…祐樹の力で退けられないかな？」

「簡単に言ってくれるね…やってみる。」

祐樹は片手に力を込めた。

するとすごい高電圧だと思われる電気がピリピリと手の周りにまとわりつく。

その手を思いっきり雲に向けて押し出した。

すごい速さで青白い電流が雲を切り裂いた。

その威力はとんでもないもので、雲全体を蒸発させてしまった…

「お前…化け物か？」

あ然としていると隣では祐樹が肩で息をしていた。

「これ…疲れるね…」

祐樹も力を使ったらすぐ座り込んだ。

空はまだ水色より少し薄いくらいだ。

「やるじゃない…でも安心して場合じゃないわよ。」

今度はアリスがこちらへ走ってくる。

電気で作られたと思われる棒のようなものを手にして…

「やばいな…あれでたたかれたら泣き叫んでいる子も黙るだろうな。」

「

「そんなこと言ってる場合じゃない！まず外に出よう！」

祐樹は呼吸を落ち着かせて外へ出ていくところだった。

僕も祐樹に続く。

外に出るとアリスはもうすぐそこだった。

「まずい！祐樹、走れるか！？」

「当たり前じゃん！戦場では疲れてなんかいられないよ！」

立派な心持ちだ。

「さっきと同じように散らばるぞ！」

祐樹はアリスの右へ、僕は左へいく。

アリスはどちらへ行くだろうか。

「行くぞ！」

祐樹はそう叫ぶと、手に電気の球みたいなものをたくさん作ってアリスに投げつけた。

僕も床をに手をかざして原子に分解し、そのままアリスめがけて手

を振る。

「こんな直線的な攻撃じゃあたらないわよ。」

アリスが飛んだ。と思うと僕の原子が祐樹に、祐樹の電気が僕に向かってきた！

「うわっ！」

とつさに身をかわしたが避けきれなかった。

体が少し麻痺する…正座をずっとし続けたような感覚だ。

祐樹のほうは無数の原子をすべて避けたようだ。すごいな…

「竜！」

こちらへ駆け寄ってくる祐樹。

「何やってるの！？敵は待つてはくれないわよ！」

そういうと2人が固まったところに、祐樹が作った電気の球の数倍はあると思われる電気の玉を投げつけてきた。

「祐樹！逃げろ！」

僕は体が麻痺してうごかない…

「そんなのダメだ！僕が守る！」

祐樹はそういうと自分の精一杯の力で出しただろっ電気の壁を作る。しかし、勢いは落ちたが防ぎきれなかった。

「うわああああああ！」

その場で倒れこむ…直撃だ。

「祐樹！何やってるんだよ！逃げろって言ったのに…」

自分の非力さに腹がたつ…まだ力についてほとんど分かってないのに、自分が非力だということは身にしてみてわかる。

「1人はもう行動不能ね。あなたももう動けない。勝負あったわね。」

アリスがこちらへ近づいてくる。僕の手足はまったく動かない。

空を見上げるとまだ水色だった。まだ10分くらいはあっただろうに…負け…か。

そのとき、祐樹が電気の球を飛ばした。

「何！？」

アリスは手に持っていた電気棒のようなもので防いで後退した。

「おっしー…」

「まさか…まさかあなた避雷針のようにすべての電気を地面に放電したの!？」

「わかんないけど多分ね。」

祐樹が立ち上がった僕に手を差し伸べる。

「大丈夫かよ？」

「なんかまったく痛くないし体も痺れてないんだ。」

「まったく…心配せんなよ！」

僕は痺れて動けなかったが、祐樹が僕の体に触れたとたん、痺れがとれた。

「あなた…電気系の術をすべて無効にすることができのね…まったく頼もしいこと。」

アリスがこちらへくる。もう一度逃げようと思い、今度は2人一緒に走り出す。

直ったばかりの足が少しもつれる。

「逃げてたら私に攻撃は当てることはできないわよ！」

ごもつともです。でも今は逃げるほうが優先だ。

「あと五分もないわ！回復している時間はないわよ！」

そういうところにはアリスは目と鼻の先にいた。

とつさに僕は床からの原子で巨大な壁を作り出す。が即座にアリスの手のうちの棒で円形に切られた。アリスが向かってくる。

アリスはまたぶつぶつ言いながら僕たちに手を向ける。

「僕がたてになるっ！」

祐樹が僕の前に立ちはだかる。

「ダメだ！」

なぜかは分からないがダメな気がした。

「竜の言つとおりよ！」

「え!？」

遅かった。アリスは僕たちに向けて電気を放った。

見事に僕たちに直撃すると、倒れこんで体が麻痺した。

「な……んで……」

祐樹は相当ショックだったようだ。

「残念ね。術の中には体質無効化の魔法や術があるのよ。」
空を見上げるともうじき真っ青になるだろうと言ったところだった。

「私に攻撃を与えることはできなかったけど惜しかったわね。この話はゆっくり本部でしましょう。戻るわよ。」

そういうとギルドの本部にっていた。

非力（後書き）

読んでいただき、有難うございました。
次回はいろんな仲間が出てきます。
これからもよろしくお願いします。

仲間

「アリスお帰りー!」

「今度の新人はどうだ!? 強いかな?」
みんなアリスに声をかける。

「ええ。なかなかよ。」

ここの空間で怪我をしても元に戻るようで、傷はきれいさっぱりなくなっていた。

そんなことより僕たちは、姉ちゃんと呼べるくらいしか年の差がないアリスに負けて、とても悔しく、自分の非力さに対する思いやら、恥ずかしい思いやらでうつむいていた。

「それで何分くらい持ったんだ?」

何分くらいって… ということだよ。攻撃くらわせるまでじゃなかったのか?

「えーっと… 大体24、5分ってところね。1人は純正の雷で、もう1人は無の属性よ。無の子のほうはホントに珍しい異の術を使うわ。」

「何!? そんなに!? しかも雷と無って…」

どつとロビーが騒がしくなった。

いろんなところからすごいわねとかホントに新人かな? などと言った声が聞こえてくる。

クランやヘレン、知らない色んな人たちまでもが顔を見合わせている。

「アリス… ということですか? 攻撃を当てるまでって言ってませんでしたか?」

僕はやっとの思いで顔を上げ、アリスに聞いた。

「がははは。何言ってるんだ! 長のアリスに攻撃があたるわけないじゃないか! ましてや力の使い方も知らない新人がよお!」

後ろから前ブランと呼ばれていた男が現れた。

祐樹が顔を上げた。

「どうということなんですか!？」

「私はあなたたちに力の使い方を体で教えるために戦いをしたわ。それと同時に、あなたたちがどれだけ術を使うことができるのか、あなたたちはホントにタッグとしてやっていけるのか、あなたたちに適切なクエストのランクは何か、などを見極めるテストでもあったのよ。大体、ギルドの長と戦って勝てるとでも思った?」

「うふふ…」と笑った綺麗なアリスが悪魔に見えた。

「え…」

僕と祐樹は恥ずかしい思いがより大きくなった。

「まあ今までアリスに攻撃を与えることができたのはエノとノワールだけだからな。」

そうだったのか…馬鹿みたいだ僕たち。

「ブランは何分くらい耐えたんですか?」

「オレか? オレなんか2分くらいでアウトだったぜ。」

え…いかにも強そうなこの人が2分?

「僕たちつてもしかしてよくやったほうだったりする!？」

祐樹が元気を取り戻したようだ。

「そうだな。2分で負けたオレでも3年でBランクの任務こなせるようになったからな。お前らはもつとすごいんじゃないか?」

僕たちは少しずつ嬉しくなってきた。

「でも負けたことにはかわりないだろう。」

遠くのほうで窓にもたれかかっている少年がこつちを見ながら言った。

「エノ!なんてこと言うのよ! あの子達は新人よ! 20分以上攻撃を避け続けただけでもすごいのよ!？」

克蘭がエノという子に向かって怒鳴る。まるで姉と弟みたいだ。

「僕は3分で勝った。」

さらっと言い返し、どこかへ行こうとするエノの前に男の人が立ちはだかる。

「俺は1分で勝ったぜ？エノちゃん。あんまり新人の子達にひどいこと言っちゃだめだよ。」

エノの頭をクシクシとなでる。

多分勝ったといっているからにはノワールって人だろう。

エノはノワールを避けてロビーから出て行った。

「ノワールじゃない！？あなたがここにるのは珍しいわね。」

「ああすぐに発つ。Hランクのクエストの途中だからな。ターゲットが逃げちまったからオレもいったん戻ってきたんだ。疲れたからな。」

「ゆっくり休んでね。」

克蘭がそういうとノワールは自分の部屋へ向かった。

周りを見渡すともうほとんどの人は散らばっていた。

「はあ…やっぱ勝ちたかったなあ。」

祐樹がつぶやくとアリスが言った。

「ちよっとつ！みんなして私に勝った勝ったっていうと私が弱いみたいじゃない！言っとくけど雷の術しか使っていないんだからねっ！」
アリスも意地を張るんだなあ…

「でも…」

「いいじゃないか。これから頑張ってクエストこなしていけば強くなれる。」

珍しく僕が祐樹を励ました。

「そうよ！あなたたち早く私たちのタッグ、<ジュピター>に追いつきなさいよっ！」

克蘭がこちらへきて話しかけてくれた。はじめてあった時と目の色が違う気がしたがどうでもいい。

「タッグ名なんてあるんですか？」

「つける、つけないは自由だけどね。」

アリスが簡単に言っただけ。

「さっきの戦いであなたたちを見た結果、どのランクから始めてもらうか決めたわ。」

祐樹は興奮を抑えきれずに聞く。

「何ランクなんですか!？」

「Dランクよ。」

一瞬世界が静まり返ったと思った。

「何で？アリス？この子達は強かったんじゃないの？」

克蘭が戸惑っている。

「そうね。なかなか戦闘中の頭の回転も早かったし、力をうまく使って助け合って頑張ってたわ。」

「じゃあ何で…」

「実質の力は絶対にBランクはあるわね。でも力の使い方がまだ下手だからすぐに力を消費してしまう。そこに攻撃されたら諸刃の剣じゃない。相打ちじゃ意味ないの。クエストで死ぬことだってあるわ。犠牲を出したくないの…」

アリスは悲しそうだった。

「だから簡単なクエストからこなしていって、力がうまく使えるようになってきたらランクを上げればいいのよ。」

僕たちだって死にたくない。

「アリスってば優しすぎるんだから。」

克蘭がつぶやいた。

「そうだね！物事は順序良くだし。竜、頑張ろうよ！」

「おう！」

よかった…祐樹も落ち込んでない。

「じゃあ私クエスト行ってくるからね。頑張ってたね。」

克蘭が行ってしまい、アリスと僕たちだけになった。

「ところでDランクって何をするんですか？」

「Dランクは基本的にものを運んだり、採取をしたりするだけよ。簡単そうだな…難しいクエストを期待していたのしょんぼりする。」「Cランク→Aランクは悪い人やたまに地上にくる怪物とかを倒すのよ。難しさでランク分けされてるわ。」

僕の知らないところで地球上に怪物なんていたのか…

「Sランクは簡単に言つと国が動くぐらいの騒ぎをどうにかして誤魔化すつてところかしら。失敗は許されないわ。」

ありえないな…

「Hは何っ!？」

祐樹はもうHランクにでもなるつもりか…

「Hは地球を滅ぼす可能性のある生き物を倒すの。」

まったく…世の中の裏の摂理は恐ろしい。

「さっきのノワールつて人はそのHランク受けてたんですよ…?」

「そうよ。ターゲットは人の形をした怪物よ。そいつを探し出して倒さないと地球が危険だから3年ぐらい前から追つてゐるのよ。体を自在に変化させれるから見失いやすいの。Hランクのクエストをしていいのは今はエノとノワールしか認めてないわ。」

すごい…あんな小さな子が…

「さっきの人たちはどういう術を使うんですか?」

「風よ。純正の風の属性ね。祐樹と同じように。エノは…よく分らないわ。すべての術が使えるの。しかもすべて相当な威力を持つてるわ。無の属性じゃないから異の術は使えないけどね。ブランは火よ。他にアレンは水の属性を持っている中で一番強いわ。雷はクリスよ。火の属性を持っている中で一番強いのはレミイつて子なんだけど…女の子が一番なんて火の属性の男たちは何をしてるのかしら。」

「え!？」

祐樹が驚きの声をあげる。

「雷の属性で一番強いのはスバルじゃないんですか!？」

アリスが悲しそうな顔をする。涙をこらえているのが良く分かる。

「スバルは死んだの…クエストをしている途中で…」

僕たちは声をかけてあげることができなかった。

「スバルの二の舞にならないようにあなたたちはDランクから初めてもらうのよ。」

アリスはほんとに仲間を大切にしているんだと分かる。

「Sランクのクエストはエノを含めてその各属性の一番強い人たちしか認めていないわ。Aランクから下は結構いるわよ。」

へー…早く強くなりたいな。

「よし！いろいろ分かったところで何もしなかったら始まらない。クエストに行こう！」

「うん！僕もそう思ったとこだ！」

「クエストはクエストボードについている紙をとって私に渡してくれたらいけるからね。」

2人は競争するようにクエストボードへ走っていった。

「あの子達つてばせつかちなんだから…」

クエストボードにたどり着いたらまず思った。

「チーム名何にする？」

「大丈夫！もう決まってる！」

祐樹は自信に満ちた顔できっぱりといった。祐樹のこういう顔は非常に信用できないものだ。

「なんだ？」

「最強ズ！」

「却下。」

祐樹からブーイングが巻き起こる。

「じゃあ竜はなにがいいって言うんだよっ！」

「僕の属性は無で君の属性は雷だから無雷^{ムライ}ってのはどうだ？」

「おお！かっこいい！それでいいっ！」

単純なやつ。そしてアホだ。無雷だと雷が無いみたいじゃないか。

まあ僕はどちらかと言うと雷を使うのやつの口数が無くなってほしいと言う思いを込めたんだけどね。

「じゃあクエスト行きますか。」

「初クエストは思い出に残るものにしようね！」

仲間（後書き）

最後まで読んでくださり、有難うございました。
次回は竜と祐樹が初めてクエストに出かけます。
2人の初挑戦です。
是非みてやってください。

初クエスト

初のクエストは思い出の残るもの…か。

そう思いながら白いボードにつけられた紙の中で一番思い出に残りそうなものを探した。

紙には左上にランクのアルファベットがついているから間違えたランクを選ぶやつはいない…と思っていた。

「竜！竜！これなんてどう！？」

祐樹の見せた紙はこうだった。

ランクA

<依頼内容>

今凶悪な怪物が夜の街をさまよっています。

警察のほうにいる特殊警察の中の術者も何人が傷を負うほどの事態です。

どうにかして怪物の討伐、もしくは、怪物たちのいた世界へ送り返してください。

契約金 10000F

報酬金 150000F

感謝金 フィール 契約金×2

(Fはこのギルドの通貨)

(契約金というのはこちら側が払うもので、他の2つはクエスト達成時にもらえる金額だ。失敗した場合は契約金は返ってこない。)

「祐樹、お前視力なんだ？」

「僕は視力Aだよ」

コイツ馬鹿すぎる。

「ここにAランクと書いてあるのが見えないのか？」

「ホントだ……」

見えなかったのか？馬鹿なのか？

そもそも5000Fなんて持つてないぞ。

改めてクエストを探しなおす。

「ねえねえ！Dって書いてあるやつならいいんだよね！」

「そうだよ。」

「これなんてどう！？」

にこつとした顔で祐樹が紙を見せた。

ランクD

<依頼内容>

最近トイレのマナーが非常に悪い人がたくさんいます。

そんな人のせいでどんどんトイレは汚れていきます。

どうにかしてトイレのマナー違反者を減らしていただけないでしょうか？

また、トイレ掃除もお願いします。

契約金 0F

報酬金 800F

感謝金 200F

「お前、思い出に残る初クエストにしたいって言わなかったか？」

「思い出に残りそうたる！？」

「ああ……臭いだけを残りそうだ。」

もうあいつの意見は無視するべきと分かった。
ボードを見ていると良さそうなクエストを発見した。

ランクD

<依頼内容>

ある人の家からあるものをとってきていただきたい。
詳細はこちらへ来たときに話す。

契約金 0F

報酬金 10000F

感謝金 20000F

これなら契約金もいらないし、報酬金もそこそこだ。

「これに決めた！」

「どれどれっ!？」

祐樹は初めは真剣な顔で考え込んでいたが「謎は多いほうがカッコいいだろ」といったらすぐに同意した。

「アリス!クエスト決めたよ!どうすればいいの!？」
離れたところにいたアリスに問いかける。

「ボードの隣の机に置けば自動でやってくれるわ。机に出てきた場所につくからね。」

机には 日本 東京 八王子市 と出てきた。

「置いたけど…どうやって空間を出入りするの？」

ああと言ってアリスは立ち上がったてこっちへきた。

「このブレスレットをはめておいて。行くときは出ると心の中で念じればいいわ。かえってくるときは入ると念じればいい。でも一度向こうへ行ったら帰ってきていいのは2度までよ。3度帰ってきた

らクエスト失敗となるから気をつけて。」

そういつて僕にブレスレットを渡しながら耳元で「祐樹に渡すとどうなるかわからないから」とつぶやいた。同感だ。

「僕のは!？」

祐樹は、次に餌をもらえるのは自分の番だ、と尻尾を振って待つ犬のように聞いた。

しかし、めんどろなことになるりそうだったのでアリスがなにか言う前に行くと言った。

ついたのは昼間の人通りが多い道路だった。

祐樹を連れて道の片隅まで引きずってく。

「なんで僕がブレスレットもらっ前に来たんだよ!」

「アリスがタッグで行くときは1つでいいから交代でつけるといいって言うてた。」

もちろん嘘だ。

「そうなんだ。」

コイツは馬鹿で助かる。

さて、依頼人を探すか……どうやって探すんだ!？

初クエスト（後書き）

毎度読んでくださっている方、初めて読んだ方、有難うございました。

次回はクエスト先での冒険（？）を書きたいと思います。

危ない初陣

こっちへ着いてからもう1時間以上はたった。

「竜……どうやって依頼人探すの??」

「今考えてるところ。」

とは言いつつもまったくいいアイディアが浮かばない。

どうしようか……

そう考えていると黒いスーツを着た男がこちらへ歩いてきた。

黒いスーツと言うと悪い人のイメージが（少なくとも僕には）あるが、顔を見ると30代後半くらいの家庭的そうなおじさんだった。

「君たちがギルドから派遣されたものか?」

「はい。」

知らない人にはあまり色んなことをペラペラと喋るものではないので、一言で済ませた。

「こんな小さな子たちを派遣させるとはなんてところだ……」

おじさんはぶつぶつ言っているが気にしないことにした。

「それでおじさん。僕たちは何を?と言うか依頼人なのになんでここにいなかったの?」

（祐樹よ。僕の心の中の名言を容易く壊さないでほしい）

「まず車に乗ってくれ。移動している途中で話す。」

僕たちは怪しむことなく乗車した。

ずうずうしいことに祐樹は助手席に乗ろうとする。

おじさんの表情を見る限り嫌な顔はしてなかったのだよししよう。車が発進する。

「私は安部雄二^{あべゆうじ}。安部さんでも、おじさんでも、どう呼んでくれても結構だ。」

安部さんか。

「さきほどの質問だが、悪かった。あそこに来るとは分かっていたが、だいぶ離れた場所にいたため、来るのに時間がかかってしまっ

た。」

「安部さんは何で僕たちの場所が分かったんですか？」

これからのクエストにも必要となってくる。我ながら良い質問だ。

「そちらの長から聞いてないのか？君の腕にはめてあるブレスレットだよ。それは発信機が着いているから私には君たちがどこにいても分かるのだよ。」

そうだったんだ。

祐樹がうらやましそうな目でこちらを見て、悔しくなんかないぞ！と言わんばかりに話題をそらした。

「おじさん。依頼内容はなんなんですか？」

信号に引っかかる。

安部さんは話しづらそうに、しかし、しっかりとこちらを見ていった。

「ある人の家からCDを取ってきてもらいたい…CDにはオレンジ色の文字で<cocoon>と書いてある。」

車が動き出す。

コクーン？虫か何かかな？

「おじさん。コクーンって何？」

安部さんはいかにも運転に集中しているかのように祐樹の質問には答えない。

また信号に引っかかる。

「君たちに任せる仕事はCDの回収。それだけだ。それ以上も、それ以下も知る必要はない。」

「つちえ〜…」

祐樹はなんでも知りたがりすぎなんだよ。

走っている最中、ずっと僕は外の風景をぼーっと眺めていた。

祐樹はすごく迷惑なことにいろんなことを聞いたり話したりしていたが、阿部さんも楽しそうだったからそっとしておいた。

「着いたぞ。」

2、3時間走ったところで停車した。

そこは豪邸と呼ぶにふさわしいところだった。きつとセキュリティも抜群なんだろう。

「言い忘れていたがそのCDは早く回収しないとまずいことになる。明日までには回収してくれ。回収し終えたらその図書館に来てくれ。私も行く。」

ずいぶん厳しい条件だ。もう太陽は山の後ろへ隠れていくところだった。

「言い忘れていたがそのCDを壊したり、PCで読み込んで使用したりしようなどとは努々思うではない。」

そのときの安部さんは鬼よりも怖かった。（鬼など会ったことはないが。）

「はい…」

返事をするに車はどこかへ走り去ってしまった。

「おじさん怖かったね…」

「ああ人は見かけによらないんだと思ったよ。」

さあ無駄話なんかしている場合ではない。

「明日までに安部さんに届けなきゃいけないんだ。急ぐぞ。」

「ちよつと待つてよ。なんだかお腹減っちゃった。」

確かに減っている。

「空間から出ると腹減るんだなあ。」

「そこのお店入ってみようよ!」

祐樹、お前は学習と言つ言葉を知らないのか。

「お金は?」

「あるよ!」

手には一万円札が握られていた。

なら問題はないか…いや、大有りだ。

「待て待て。まさか依頼人様様の車からパクってきたなんてことは無いよな。」

「パクるなんて人聞きが悪いなあ。貰ったんだよ。」

「いつ貰ったんだ?置いてあるものを勝手に貰うことをパクるとい

う意味だと理解しているか？」

どうせまた「えっ？違うの？」と言ってくるに違いない。

「竜ったら疑り深いんだから。僕がおじさんと話しているときにむこうからくれたんだよ。お腹空かないようにって。」

ホントかどうか疑わしいが信じるでしょう。

「前言撤回するよ。人は見かけによるんだな。」

祐樹と僕は顔を見合わせて笑った。

「アリスっ！」

こちらはクエスト管理人のリリィ。

「どうしたの？」

「まずいことが起きたわ！Dランク任務として契約したはずのクエストが今になって急に依頼人から「クエストの難易度が上がったため、Bランクとしての契約と改正していただきたい。」との連絡が入ったわ！」

「じゃあそのDランクの受注用紙をBランクになおせばいいだけじゃない……」

そうは言うものの、アリスは何がまずいのか察したようだ。

「その受注用紙がなくなってるのよ……」

アリスは最後まで聞かずに自分の机に向う。

「嫌な予感ほ当たりやすいのよね……」

そっぴいながら机の中のクエストの受注用紙をあさる。

「ビンゴ……」

そこには

<契約成立>

契約者 タッグ 無雷

と書かれていた。

危ない初陣（後書き）

読んでくださり有難うございました。

次回も初陣の続きです。

楽しみにしていてください。

事実

「竜！このラーメンマジ最高っ！」

「うん。このチャーハンもおいしいよ。」

僕たちは腹ごしらえのために近く中華料理店に入った。もちろん明日の食費も考えて食べている。

「なあ祐樹、安部さんのことで気になったことない？」

チャーハンを口に運びながら聞く。

「んゝ…初対面の人にお金くれるような優しすぎるのかな。」

「それも確かにおかしいけどもとおかしいことがあるじゃないか…」

祐樹は思い当たらないようだ。

「場所だよ場所。僕たちがクエストに来る時に机には東京の八王子市に着くと表示された。でもその場所に安部さんが来たのは1時間以上たってから。おかしくないか？」

「ホントだ。普通はクエストを依頼するときに来てほしい場所を指定するはずなのに、おじさんはそこにいなかったね。アリスが依頼人の探し方を教えてくれなかったことから依頼人の近くに着くってことだろうし。」

なかなか鋭い…僕はそこまで思いつかなかった。

「もしかしたら仕事かもしれないけど…」

「仕事をしてたならわざわざ「離れた場所にいた」なんてこと言わないからその可能性は低い。ってことだね。」

素直にうなずく。

「それともう一つ。あきらかにおかしいことがある。」

「ここだね。」

祐樹はやっぱ馬鹿じゃない。天然なだけだな。

「そう。2時間か3時間もわざわざ車で移動するくらいなら最初からここに僕たちを来させればよかったんじゃないか？」

もう祐樹はラーメンを食べ終えていた。

僕は喋ること考えることに夢中でまだ半分くらい残っている。要領のいいやつはいいなあ。

「そうだね。どうしてだろう…」

考え込む祐樹。僕はそのうちにチャーハンを平らげる。

「まあ考えてても始まらないし、おじさんも僕たちとはそんなに係を深めるつもりはなさそうだったしいつか。」

「そうだな。僕たちがしなければいけないのはCDの回収。それだけだからね。」

代金を払い、外に出るともうだいぶ暗くなっていた。

「店の中の時計じゃ8時過ぎだったよ。」

案外抜け目がないな。

「じゃあそろそろいきますか。」

この豪邸は誰が住んでるのか気になったがそんなことはどうでもいい。

門の前に立って思った。

「こんな豪邸には赤外線とかの設備あるに決まってるよな。」

「あるのは入り口だけだよ。」

なぜ分かる!?

「ああ…僕がおじさんと話してるときに赤外線装置は入り口の扉だけで他のカメラとかはダミーだから気にすることは無いって教えてくれたんだ。」

待てよ。安部さんがなぜそんなことを知ってるんだ…

さらに謎が深まる。しかし僕たちの仕事はCDを回収することだけだ。

「じゃあこの門は普通に通ればいいな。」

「竜お願いねっ。」

思ったんだが、わざわざ僕たち2人を分解、再構築するよりもこの門をいじったほうがエネルギーの節約になる。

門に手をかざす。門が朽ちてきた。

僕は中に入ると門を戻そうか迷ったが逃げ道が無くなると困るのでそのままにしておくことにした。

原子は僕の周りを漂う。

「なあ…その原子邪魔になんない？」

「かなり邪魔だ。」

門から扉までは8mほど。どうするか迷って木の陰に隠れながら考える。

うーん…どうしようか。

「竜っ。」

人が考え込んでいるときは極力喋りかけないでいただきたい。

「何だよ。」

「別に僕たちは招待されたわけじゃないんだし玄関から入ることもないんじゃない？」

ゴメン。喋りかけてきてくれてありがとう。そのとおりだよ。

僕たちは一回外へでる。

この豪邸は周りに家が立っているが。家と豪邸との間は5mくらいあって人など通りそうもないので悠々と通ることができる。

豪邸の敷地の塀は2mちよつとの高さだ。

「さて…祐樹。提案したのはいいが、どうやって登るんだ？」

「ゴメンそこまで考えてない…」

勘弁してほしい…

ん？待てよ。

僕の周りに漂っている原子を脚立のように組み立てた。

「竜ってばちゃんと解決してんじゃない。」

とっさに思いついたんだが結果オーライか。塀の上に登ったらちゃんと脚立は分解した。

登ったところには高い木が立っていた。

さっきと同じことを繰り返す。

地上から10mほどの高さまで登った。

「ここからどうすんの？」

「ノープロブレムだよ。」

自信満々に答えたときだった。

「竜！黙って。」

突然今から忍び込もうとしていた部屋の電気がついた。

こいつ電気を感じ取れるのか？

聞こうと思ったが聞けるような状態ではない。

ここの家の人はカーテンも閉めずにテレビを見ている。

気づかれたら終わりだ。

緊迫した空気が流れる。

20分くらいたっただろうか。豪邸の主は部屋を出て行った。

「ふう…心臓に悪い…」

「まだ気を抜いちゃだめだよ。」

そうだ…まだ仕事だったな。

「戻ってくる前にさっさと中へ入ろう。」

今度は原子を細長い鉄の棒に変えて向こうのベランダにとどかせる。

ギリギリだが、なんとかとどいた。

すぐにベランダまで伝っていく。

落ちたらどうしようと言う不安もあったが何とかたどり着いた。

そのとき部屋にさっきの人が戻ってきた。

まずい。ここは窓の隅のガラスじゃないところだからまだ見えない。

しかしさっきまでテレビを見ていた椅子に座れば確実に見つかる。

どうする…どうする…どうする…どうする…

頭だけが空回りする。豪邸の主は近づいてくる。

もうだめだと思ったとき、急に明かりが消えた。

木の方を見ると祐樹がVサインを出している。タッグを組んでよか

ったよ…

部屋から人が出て行き、祐樹がすばやくこちらのベランダへ移る。

「ありがとう…」自然と言葉が出た。

祐樹は不思議そうな顔をしていたが満更でもないようだった。

棒を回収し、中へ入る。

どうやらここはただのリビングのようでCDらしきものは何もない。部屋を出て他の部屋を探す。

僕たちと違って目の見えない一般人はまだブレーカーを元に戻せないようだ。

「おじさんが言ってたんだけどこの人は1人暮らしなんだって。」
それにしても無駄に広い。

「あとブレーカー落とすだけじゃすぐに元に戻るだろうから電気の流れを切断しておいたよ。そのせいで少し時間かかったけどね。」

「抜かり無いな。あとはCDを探すだけだ。」
声を殺して話す。

5つの部屋を探したが、CDは見つからない。
「ないな……」

「うーん……」

6つ目の部屋に入ったときCDが目に入った。
それはまさしくc o c c o o nと書かれていた。
色までは暗くて判断できないが、c o c c o o nと書いてあるんだからこれだろう。

「トラップはないか？」

「電気関係のトラップはないよ。」

恐る恐るCDを手にする。

大丈夫だ。

「あとは外に出るだけだけど門直しとかないとダメだな。」

「そうだね。電気回路は切断したから赤外線も消えてるはずだよ。
だから玄関から堂々と出ても大丈夫。」

僕たちは迷うことなくまで着いた。

玄関をでながら案外簡単な仕事だったなあと思った。

扉が閉まるときに音が鳴らないようにゆっくりと閉める。

そのときに扉の隣の表札が目飛び込んできた。

そこには……安部と書かれていた……

事実（後書き）

読んでいただいて有難うございました。
疑問点がいろいろと洗い出されましたね。
次回は疑問点を解決していきます。

減って増えた謎

偶然か？

いやいや。そんなはず無い…とは言い切れない。

「竜。どうしたの？」

祐樹は気づいていないようだ。

「いや、なんでもない。早く逃げよう。」

そう。ここはまだ戦場。気を抜いている場合ではない。

差し足、抜き足で門の外まで来たらすぐに門を元に戻した。

「ふう…ミツシヨンクリアってか？」

「うん！そうだねっ。」

2人で喜びを分かち合う。

「今からどうするの？」

ん…今は12時くらいか？

「何時か分かる？」

「11時半だよ。」

僕たちがさつきいた中華料理店を指差して言う。

「よく見えるなあー。」

「視力Aですから！」

僕はBだから少し羨ましい。

「まずここから離れよう。」

いくらか歩いたところでちょうど良いカプセルホテルがあったのでそこにチェックインする。

「話したいことがあるから1部屋のほうがいい。」

「せまくない…？」

「何とかなる。」

2人ともインすると明日の食事代が危うくなりそうなので無理して1部屋だけにしてもらった。

畳1畳ほどの広さなのでさすがに窮屈だ。

「竜の嘘つき…せまいよ…」

「仕方ないだろっ！そんなことよりこれだ。」

CDを2人のせまい間に置く。

それはやはり予想したとおりオレンジ色の文字でc o c c o o nと書かれていた。

「電気系のトラップは無いのはホントだな？」

今更ついていたと言われたらご愁傷様だ。

「うん。発信機も盗聴器もついてない。」

よし。

「じゃあ僕の考えを言っていくよ。」

「声を落としてね。」

分かっている。今でも十分過ぎるくらい静かだ。

「安部さんは初めは1時間以上もかけて僕たちのところまで来た。」

そんなことわざわざする必要はない。なぜ僕たちとそれほどの距離をとっていたか分かる？」

真剣に考え込む祐樹。

「何か理由があった。でも…それが何かは分からない…」

「そう。理由があった。安部さんが自分の家へ忍び込んでもらうと言っことをばれないようにするという理由が。」

どうやらいまいちピンと来ないようだ。

「僕たちがあの家を出るときに僕は見たんだ。彼の家が安部だったことを。」

祐樹の表情が一変した。

「なんのためにそんなことを？」

「ここからはまったくの空想だけど、このCDは兄弟で作ったものだったんじゃないかな？でもこれをお兄さんのほうが自分の物にしようと考えた。そんなことは許せない。だから奪われる前に奪おうと考えた。兄弟で作ったならこのCDがあれば無防備に置いてあっても不自然じゃない。」

「なんで兄弟だと分かるの？」

正直聞いてほしかった質問だ。

「ほら、安部さんの名前雄二だったろ？あれは声に出しただけでは分からないけど安部さんのポケットから雄二って書かれたハンカチが見えたんだ。二つていうのは基本的に兄弟の弟のほうにつけられる。だからそう思ったんだ。空想だから分からないけど…」

「それならたくさんあの家について知ってるのも変じゃないね。」

「うん。これですべてつじつまが合うはずだ。」

やっとすっきりした…

多分安部さんの家に来るまでに2時間以上もかかるような場所に僕たちを来させたのも時間帯を夜にして、ばれにくくするためだったんだろう。

でも初めから夜専門の仕事にすればよかったのに…

そうだ…なんで契約のとき昼にしたんだ？

「まてよ…このCD…相当すごいものかも。」

「やっぱりそうだね。昼間に僕たちを来させておいて夜に忍び込むように時間を調整するような面倒なことまでしてるからね…」

祐樹も気づいているようだ。

初めから夜専門にするとCDがすごいものと悟られる可能性がある。だからこのCDに重大な秘密があることを隠すために昼に来てもらうようにしたのか？

しかもDランクのクエストに…

「うーん…このCDが何であれ僕たちはこれ以上知る必要はないんだよね。」

「そうだな。もう今日は疲れたし寝るか。明日CDを渡してクエスト達成だ。」

少しせまい中で体を縮めながら眠りについた。

減って増えた謎（後書き）

ありがとうございました。

謎が増えてしまいましたね。

次か、その次には戦いが入ると思いますので楽しみにしてください。さ。

孵化

「いつてえー！」

朝起きると体がとんでもない形で硬直していた。
バキバキ…ゴキ。色んな間接が嫌な音を立てる。

「体硬すぎるんだよ。」

どうやら祐樹は平気なようだ。平気な祐樹が恨めしい…
苦痛がやつと治まったところでホテルを出た。

「朝食どこにする？」

「もちろん昨日と同じお店で！」

「2日連続か…まあいいよ。」

祐樹はあの店が気に入ったようだった。

一通り朝食を済ましたところで図書館へ向かう。

「早かったね。」

声が出たほうを見ると安部さんが椅子に座っていた。

「おじさんこそ早いね。」

「ああ。調べたいことがあったからそれもついでに済ましておこう
と思ってね。」

いや、きつと泊まりで出かけてくるとか何とか言ったから家へ帰り
づらいのだろう。

「ところでCDはどこだ？」

「ここにあります。」

安部さんの目の色が変わったのが分かった。

「では契約成立だ。このカードはクエスト達成の証拠みたいなもん
だ。これをそちらの長に渡せば金をもらえるだろう。」

僕たちにカードを渡した。透明で何も書かれていないカード。

「早くCDを渡してもらおうか。」

素直に応じる。

「じゃあ僕たちはこれで…」

あのCDが何であれこれで僕たちは赤の他人だ。

「君たち。ここから先は来ても来なくても自由だが、このCDが何か気にならないか？」

ああ気になるさ。でも面倒事には巻き込まれたくない。

「気になる！」

祐樹が僕の意見を聞く前に答えてしまった。

「なら教えてあげるよ。まず私の家に行こう。」

普通ならこんな言い方をされたら間違いないく誘拐犯か何かだと思うことだろう。

しかし悪い人ではないと思ったのでついていくことにした。

それに面倒事は嫌だけどそれ以上に気になったしね。

安部さんの車に乗る。

乗って2分もしないうちに着いたのは再び見る建物だった。

しかし僕たちはそれはもう予測していたので驚くことは無かった。

「ほう。驚かないのかね。じゃあ中に入ろうじゃないか。」

「中はお兄さんがいるんじゃないんですか？」

しまったと思った。できることならこちらが分かっていることはあまり知られたくなかった。

「これはたまげたね。ここの人が私の兄だと分かっているとはなかなか切れ者じゃないか。」

そうは言ったものの彼は全然驚いていなかった。

そんなことよりも彼は急いでいるようだった。興奮しているのだろう。

「兄は今仕事に行っている。大丈夫だ。入りなさい。」

2度目の来訪。今度はしっかりと玄関からだ。

僕たちは安部さんについて2階のPCがある部屋まで来た。

「さてこのCDはなんだと思う？」

「おじさんにとって重要なもの…かな。」

彼は苦笑し始めた。

「重要なもの？確かにそうだ。だが、そんな言葉で片付けられなく

はないな。」

話しながら椅子に座り、PCのスイッチを入れてCDを入れる。

「このCDは私たち兄弟の作った最高傑作だ。これが何かということとはこれから分かるさ。」

なんだか気になったが彼は話し続けるので聞けない。

「しかしこのCDを何年も何年も何年も何年もかかって作り上げたのにあいつは言った。この家から出ていけとな。理由を聞いたらふざけたものだった。お前はもう用済みだ、だつとよ。もう私は怒りと憎しみの塊となった。」

壊れたロボットのように、まるで僕たちがここにいるということを忘れていくかのように話し続ける。そしてどんどん口調が強くなっていく。

「私は家から追い出され、行くあても無くさまよったよ。世の中は冷たいもので誰一人として助けてくれなかった。そしてたどり着いたのが君たちだ。君たちのところに仕事を頼もうと思った。頼むためには裏のルートを使わないといけない。ホントに大変だったよ。でもそれほどまでに私の怒りは大きかった。」

PCの画面を見るとCDを起動させているのか、緑のメーターらしきものが真ん中くらいまでたまっていた。

「初め仕事の依頼をした時は困ったよ。何日たってもそちらから人が来ない。だから少し高くつくが、Bランクの任務にしてもらった。そしたら急に君たちが来た。所詮、人などそんなものだと思ったね。」

彼が椅子を回転させてこちらを見た。初め会った時は鬼だと思ったが、今はさらに怖い。

「兄が、完成まであと2週間足らずと言っていたから非常に焦った。しかし神は：死神は私についたようだ。君たちのおかげで兄がそのCDを使う前に盗み出してくれたからね。CDを使えるのは一度きりだ。おかげで私は変われる！」

PCを見ると緑のメーターが満タンまできていた。

「c o c c o o n…すなわち繭、繭が孵化するときこの世でもっとも素晴らしい生命の誕生を見ることが出来るだろう。しかしお前たちはこの世でもっとも残酷な生命の終末を見届けることとなる。」

彼はそのセリフと共に緑の光に包まれた。

「だ…ダメだ！」

「黙れえ！」

なんだか嫌な悪寒がした。

「私は力がほしいのだよ！人を超越する力が！初めから特別なお前から何が分かるって言うんだ！？この力で復讐してやるよ。兄や冷たい世の中にな！」

彼は腕を思いつき僕たちに向けて突き出すと僕たちは外まで吹き飛ばされた。

「くっそ…Dランクは收拾だけって言うてなかったか？」

愚痴をこぼしながら体を起こす。

「祐樹！大丈夫か！？」

「大丈夫だよ！そっちこそ大丈夫！？」

2人ともたいした怪我はなさそうだ。

あいつの力は風か…

「早くなんとかしないと世界が壊される…」

……

あれ？祐樹なら「僕たちが止めないと！」とかいうはずだが…

「どうし…」

僕は愕然とした。

世界が止まっている。

テレビも、町も、人も、鳥も、すべてが止まっている。

黒ずんだ紅のような色がこの屋敷以外を覆っている。

その色と、今いるここを境界線のようにして、この屋敷一体以外のすべての場所が止まっている…

「何が起こってるんだ…」

「きつと…おじさんのお兄さんはあのCDは危なすぎる…」と思った

んじゃないかな…だから使わなかったんだ…」

祐樹は力の無い口調でそういった。

僕もそうだと思う。それに…いや、まずあいつをどうにかして止めない…」

「ふふふ…ふっははははは！素晴らしい…なんと素晴らしい力だ！世界の進行が止まった。これからこの世は後退していく。お前たちを生贄として世界を一から創り直すのではないか！」

な…あいつは世界を一から創るというのか…

「結局はあいつもベインと同じで世界を破壊することが目的だって言うのかよ！」

「そんなの許せない。絶対にこの世界を守る！」

「守るぞ！2人でね！」

祐樹は一瞬驚いたようだったがすぐに笑みが戻ってきた。

「そうだね！2人でね！」

「最期のお喋りは済んだか！？済んで無くても死んでもらうぞ！」なんてやつだ。

あいつの手から風の塊のようなものがいくつも飛んでくる。

それがかわすうちに境界線までできてしまっていた。

「ぐ…」

「まず1人！」

そのとき祐樹が電気の球を投げつけた。

「2体1じゃ勝てないのか！？」

火に油を注いだようだが祐樹に気が向いている間に境界線から離れる。

「クソ共が…どれだけあがいたって埋めよつの無い力の差はかわんねえだろうが！」

ああ…これがホントに安部さんだろうか？昨日までの面影はまったくない…人はホントに変わるものだな…

四方八方に風の玉を投げまくる…その間に僕と祐樹は合流する。

「竜…おじさんはまだ自分の力を分かっていない…きっとおじさん

には物とか人とかを停止させる力もあるはずだよ。」

「世界が止まったのはCDのオプシオンかなんかじゃないのか…」
絶望的になる…

「まだ絶対とは言い切れない。だから停止させるって力を使えるってことを悟られないように気を…」

ダダン！ドカン！

くそ…今度は僕たちを狙ってきた。

「消える消える消える！私は神となり、世界を創りだすのだ！邪魔はさせん！」

なんと見苦しい…神となったところで永遠に生きることはいかにできないのに…

「竜、あと一つ…向こう側行っても僕たちは停止しないから大丈夫だよ！」

それだけ言うといいつに向かつて走っていった。

僕って守られてばかりだな…

嘆いている場合ではない。攻撃だ！

地面に手をかざす。さっき吹き飛ばされたときに壁や家具なども飛んできたのでたくさん物がある。

「うおおおおお！」

ありったけの数を分解すると、家くらいの大きさとなった。

「お…重い……」

「な…なんだそれは…」

あいつはさっきまでとは打って変わっておどおどとしている。

助けられるだけではダメなんだ、嫌なんだ！

「そおら！」

すべての力を使って原子を無数の弾丸のようにして飛ばす。

「うわあ……僕も加勢だ！」

祐樹も一緒に電気の球を投げつける。

「つく…」

あいつは自分の周りに風のボールをまとった。

しかしそのボールも少しずつ弱まっているのが分かる…

「クソ共のくせに…私が…私がこんなことではいけないんだ…復讐するのだ…すべてを壊すんだ！」

叫んだとたんに無数の弾丸と電気の球は空中で静止した。

「っな！？」

「まずい……自分の能力に気づく……」

「そうか…そうか…そうだ！私は神となるんだ！」

神様なりきりセツトの付録CDは使わないでほしい…

風の球を今までと比べ物にならないくらい大きさ、いや、まだ大きくしようと力をため続けている。

正直僕は動けない…さっきの攻撃にすべての力を使ったようだ。

かといって祐樹1人では勝てる方法はない…

「祐樹…この場面2度目だな…まったく…情けないよな…」

「そんなこと無い！大丈夫だ！僕が止めるから！」

口では言うものの、無理なことは分かりきっている。

祐樹はたちあがり、あいつのほうを向く。

「クエストは終わってるんだ…帰ることだってできるんだぜ…？」

「僕が止めるって言うてるじゃないか。竜、責任とか感じる必要ないんだよ。僕たちタッグなんだからな！助け合っつのは当たり前だよ！そもそもここで帰ったら世界が壊れるじゃないか！」

情けない…ホントに情けない…

「避けられてはたまらんからな。君には動かないでいてもらっつよ。」

「何！？」

祐樹の動きが止まった。あれでは術が出せない。

「くっそおおお！」

「じゃあな。我が野望に貢献してくれた小さなゴブリンたちよ…」

風の球を投げつけた。

終わったと思った。

ギルドに戻ろうかと思ったが世界が崩壊するなら死んだほうがましだと思えた。

祐樹には悪いことをしたと思った。

祐樹に謝りたいと思った。

いろいろなことを頭の中をよぎる。

初陣は心に残る前にこの世に残らなかったな…

あと数メートルで当たる…というところで誰かが現れた。

神だと思った…しかしそれは神ではなく死神だった…

そう、ベインがいたのだ。

孵化（後書き）

最後まで読んでいただき、有難うございました。
今回はどうでしたでしょうか？
次回ベイン登場です。

差

ベイン…か？

前は少し太った。ピエロのような感じだったんだけど…

今はスマートで紳士を思わせるような服装をしている。

体の周りには中に手が入りそうな、奥行きのある絵が描かれたトラ
ンプが浮いている。

姿形が前とすっかり変わっていたが、あの禍々しい魔力の塊は覚えて
いる。

体が危険信号を出しているのが分かる…

「久しいな。憐れな光のものよ。」

僕たちの方を見てそういうと突然風が消えた。

多分…ベインがやったのだろう…身動き一つせずに。

「な…なんだお前は？お前も殺されたいのか！？」

「あの程度の風球しか使えぬやつが私を愚弄するのか？」

その冷静な言葉にはこれ以上込めることができないと思われるほど
の殺気が籠っていた。

あいつはガタガタ震え始めた。

「じゃ…じゃ…邪魔を…する…のかっ！？」

「黙れ。」

これが圧倒的な力の差というものなんだ。

あいつは突然体が真つ二つとなり、声を上げることすらなかった。

無論、ベインは指一つとして動いていない。

「私の怒りを買うというのは死罪に等しいぞ。」

その言葉が恐ろしさ^{こわかい}をひきたてる…

「せっかく紅界^{こうかい}を張れるまともなやつだと思ったのだが…」

周りを見渡している。

「私のものを破壊しようとするなら仕方がない。」

そう言くと、こちらへゆったりとした足取りで向かって来た。

「お前は誰だ!？」

祐樹は僕の前から動こうとしない。

僕はやっと少し動けるようになった体を起こした。

「ゆ…祐樹…やめろ…」

言葉が見つからない。

「お…お前は誰なんだ!？僕たちの敵か!？」

「うるさい。」

その一言で祐樹は倒れた。

右肩から胸あたりまで引き裂かれたような痕がついている…

赤い液体が地上を流れる…

「がつ……」

「ゆ…ゆ…うき？」

反応がない…

「大丈夫だ。お前の仲間のようだったから殺してはいない。」

なんなんだコイツは…

「そうか…分からないのか。まあ無理はないな。私の本当の姿を見るのは初めてだろうからな。」

そんなことを言っているんじゃない!

「ほう…ならどういう意味だ？」

なぜ僕たちを助けた!?

僕はこれ以上睨みつけられないくらい睨みつける。

「そんなもの私の勝手だろう。」

そんな嘘を聞いているんじゃない!

「お前は遠まわしに聞くのが好きなようだな。きつぱりと言えばよいのに。」

じゃあ言ってやるよ!お前は何が目的で助けた!?

「若者は好奇心旺盛だねえ…それが故に命を落とすこともあるというのに。」

ベインも十分に若い。

お前には僕の心の中が嫌というほど見えているはずだ!

「

」

お前には僕の心の中が嫌というほど見えているはずだ!

早く言えよ！

「そう急かすなよ……まあいいか。お前はとてもしいい能力を持っている。私が惚れ込むまでにな。その力を失うなんてことはさぞ哀しいことではないか？」

それだけか？

「疑り深いな。目的はもう一つあったのだが今はまだ良い。」

ベインの体が朽ちてきた。ここから消えるつもりだろう。

「待て！」

やつのことで叫んだのと同時に今ある力を振り絞って小さな塊を飛ばす。

「もつと強くなれ。」

その塊は当たることなく、透りぬけていった。

差（後書き）

最後まで読んでくださって有難うございました。
とんでもないことになってしまいましたね。
次回、初クエスト終了です。

得たもの

世界が…動き出した。

ベインがやったのかどうかはわからない。

先ほど壊れた屋敷は元に戻っていた。

そして、僕たちはその屋敷の庭に倒れていた。

「ゆ…祐樹っ！」

依然として返事がない…

早く治療しないと…まずい…

<入る>

そう心の中で念じた。

体がふわっと軽くなり、着いたのは本部のロビーだった。

「竜！祐樹！」

アリスが真っ先に声をかけてくる。

「アリス、祐樹が…祐樹が！」

「ヘアリー！来て！」

アリスが叫ぶと、女の子がこちらへきた。

「うわっ…ひどい傷…」

そういつてその子が手をかざすと緑色の光が傷を包んだ。

「ヘアリーはね、傷を治すことができる異の術を使える子なの。」

無の属性は少ないって言ってたかったか？

まあ今はどうだっていい。

「それより…祐樹は治るんですか！？」

「大丈夫、そんなに焦らないで。今ヘアリーが頑張ってるでしょ。」

仲間を信じなさい。」

そうか…彼女を信じよう。

祐樹の傷が少しずつ治っていく。

「ううっ…」

「祐樹！？」

アリスも僕もほっとする。

「よかったわ…」

そういうとアリスは立ち上がった。

「ゴメンなさい。あなたたちがクエストに行ったあとで依頼主から連絡がきたの。Bランクに変更してほしいって。クエストの危険性を見抜けなかった私のミスだわ…ゴメンなさい…」

アリスは責任を感じているようだった。

「アリス、大丈夫。竜も気にしなくていいよ。僕は大丈夫だから。」
振り返ると、祐樹が起き上がっていた。

「目に見える傷なら全然平気だよ。見えない傷のほうずっと苦し
くて痛い…だから責任感ないでねっ。」

祐樹は無理して作った笑顔を見せた。

苦しい…きつとアリスも同じだろう。

アリスのうしろ姿を見ると、泣いているようだった。

「ともかく、死ななくて何よりだわ。これからはこんなミス絶対に
起こさないから…」

それだけ言って歩いていった。

「祐樹、ホントに大丈夫か？」

「うん。少しの間はクエストいけなかもしれないかもしれないけど…」
悲しそうだった…

「大丈夫。クエストに行くことより祐樹の体のほうが大切だ。」

「ありがとう。」

「あなたも人の心配してるけど、休まないとダメよ。」

へアリーが言う。

「そうだね。心配してくれてありがとう…」

僕は立ち上がる。

「祐樹、歩けるようになったら来いよ。」

「うん。」

自分の部屋に向かう。

部屋に入るとソファーに腰をかける。

弱くて、情けない…仲間が頑張っても何一つできない。
悲しかった。

もう嫌だ…

何分かぼーっとしていたら、急に部屋をノックされた。

「祐樹？早いな。」

ドアを開けると祐樹ではなく、克蘭だった。

「入ってもいい？」

「あ…うん。いいよ。」

2人ともソファに座る。

「初めてのクエスト、達成おめでとう。」

にっこりとした顔はすごくかわいかった。

「ありがとう…でも…」

うつむいたまま何も話すことができなくなった。

「分かってるわよ。あなたの気持ち。」

あ…そうだった…恥ずかしいな。

顔を上げると紅いきれいな目と目が合った。

「そういえばカラーコンタクトしてるの？」

「してないわよ。私、術を使うと目の色が蒼になるのよ。普通は紅
よ。」

克蘭はまた、にっこりした。

「じゃあなんで僕の気持ち…」

「分かるわよ…そんなの。心を読まなくなっただけ。」

そりゃそうか…僕のせいで祐樹は…

「私も同じなもの…」

「えっ？」

「私の能力は心を読むことですよ。もしクエストの中で戦闘が起こ
っても、私はたいした術が使えないから自分を守るだけで精一杯。
でもヘレンは私を助けてくれる。助けられるのはいつも私で傷つく
のはヘレンばっか……」

克蘭は泣きそうだった。

「あなたもそうなんですよ？」

言葉が出なかった。

「傷つくのはヘレンばっかで責任感じてるのに、ヘレンはいつも私に責任感じなくていいって言うのよ？いつもいつも助けられてばかりで、感謝しきれないのに、タッグだから助けるのは当たり前だって言うのよ？いつも攻撃されそうになると、私の前に立って敵の攻撃を自分の体で防いでぼろぼろになるのよ？私はそんな背中見てるだけ…あなたもそうなら…苦しいわよね…」

クランは泣いていた。

「僕も…同じ…祐樹は助けってくれるばっかで、僕は何もできない。自分の非力さに腹が立つけど何もできない…弱いくせに意地ばっかり張って、心の中で祐樹馬鹿にしてるのに、いざとなると、あいつのほうがずっと頑張ってる。祐樹が僕に指示を出して、僕は動くだけ。クエストが始まったときからふざけたことしてるか思ってもあとになったら、それが大切になってく。僕は何一つとして役に立ってない…」

僕も泣きそうだった…でも女の子の前で泣いたら男じゃない…

ああまた僕って意地張ってるよ…

「強く、なりましょ…泣かなくていいように、誰も傷つかなくていいように。」

クランは涙を拭いて笑って見せた。

彼女の笑顔のおかげで笑顔になれる。

「うん。」

「強くなってくれるのは嬉しいけど勘違いしないでねっ！」

突然声がしたのでびっくりしてドアのほうを見る。

祐樹がいた。

「ゴメンねっ。盗み聞きしちゃった。」

「どこから？」

「全部！」

無邪気な祐樹。全部聞かれてたなんて恥ずかしい。

下をつつむいている僕に向かって祐樹が話しはじめた。

「竜、僕言ったじゃん。タッグだから助けるのは当たり前だって。それもあるけど、もっと大きなものがあるんだ。」

僕のほうを見てにつこりする。

「竜が弱いから助けるんじゃないよ。僕も竜と一緒にだよ。誰かが傷つくのが見たくないから助けるんだ。それに竜は役に立ってないなんてことは絶対ないからね！いるだけで、そこに居てくれるだけで役に立てることだってあるんだよ。守りたい、助けたい、協力して勝ちたい、って気持ちがあるから頑張れるんだ。」

思わず泣きそうになったが：我慢：

「今までの2回はたまたま僕のほうが運がよかっただけだよ。竜も同じ気持ちなら、次は助けられるかもしれないね。助け合って頑張ろっ！」

やっと分かった。どんなにコイツが馬鹿やってても、ウザくても、何やってもコイツと一緒に居るか。コイツが居てくれるから僕がいられる。コイツの優しさに僕は助けられる。

「ありがとう。」

涙はでなかったが、代わりに感謝の気持ちが言葉に表れた。

「ヘレンも同じ気持ちかなあ……」

クランは嬉しそうだった。

「ありがとね。励ますつもりが、励まされちゃった。」

「こつちこそありがと。」

クランは出て行った。

出て行くときに

「私たちの部屋は0805室だけどアリスに頼んで近くの部屋に移動させてもらってから遊びに来てね！」

と言っていた。今度お礼を言いにはかなければ。

今日は疲れたから、クエストの報告とかは明日にしよう。

自分の部屋の前で立ち止まる。

「祐樹、今度は助けられないように強くなるからな！」

そういうとすぐに自分の部屋のほうへ入った。

祐樹も自分の部屋に入った。

窓の外を見ると雲は無いのに雨が降っていた。

得たもの（後書き）

ご朗読有難うございました。

とうとう初クエストが終了です。

竜と祐樹は大きな何かを得ることができたと思います。

次回は無の属性と異の術がごちゃごちゃになってると思うので、そこを踏まえて、竜の修行に付き合ってくださいます。

前向きに…

眩しい日差しで目が覚めた。

雨は止んでいたが、外は薄暗い。

僕は昨日はそのまま寝てしまったので、シャワーを浴びることにした。

久しぶりだったこともあって、とても気持ち良かった。

「竜、早いね。おはよっ。」

「おはよ。起きて大丈夫か？」

「見た目はもう普通に傷跡も残りそうにないけど、火傷したような痛みがある…」

思わず心配になる。

「でも昨日よりは全然大丈夫だよ！」

僕を気遣ってることはすぐに分かるようなセリフだ。

「そうか。今はゆっくり休めよ！」

一応心遣いは受け取っておこう。

キッチンへ行き、パンのトーストを食べたら部屋を出る。

「祐樹はちゃんと休めよ！」

祐樹はおとなしく部屋に戻る。

ホントに痛そうだ…看病してやりたい。

でも僕にはやらなければいけないことがある。

その前に本部へ行き、クエストの報告をしなければ。

行く途中、クランに会った。

しかし挨拶を交わしただけだった。

くっそ…もっと社交的だったら…

そんなことを考えていたら本部に着いた。

朝早いというのにみんなにぎやかだ。

ん？待てよ。

僕たちは帰ってきたときを夜として僕は考えてるけどここは時間は

無いんだった。

僕たちが帰ったところに起きた人からすればもう夕方くらいなんだ。
どうでもいいか。

クエストボードの隣の机へ向かう。

「こんにちは。用件は？」

机が喋った：便利な世の中になったものだ。

「クエスト達成の報告です。」

「キーを挿入してください。」

キー？

「キーって言うのはクエスト達成時に依頼主からもらった透明のカードのことよ。」

振り返ると、知らない人が立っていた。

不思議そうにしているとあわてたように付け加えた。

「あつ：ゴメンね。私はリリーよ。クエスト管理人の仕事をしてるの。」

リリーさんか。

「ありがとうございます。」

僕はカード：じゃなかった：キーを指定されたところに差し込む。
ピーと言う音がして、透明なキーが真っ白になって出てきた。

「何ですか？これ。」

「それは自分のクエストの達成したって言う証拠よ。簡単に言えば
勲章みたいなもの。たくさん持つてると自慢できるでしょ。」

そういつて笑うと机に座った。

「まったく：アリスったら少しは自分で掃除してよね。」

愚痴をこぼすリリー。

「あの：あとどうすればいいですか？」

「待つて。今やってるところよ。」

リリーはP C（？）を打っている。

「よし終わり。はいこれ。」

渡されたのは変な紙だった。

そこには

報酬金	80000F
感謝金	20000F

と書かれている。

「すいません。これ間違いじゃないですか？」

「間違いじゃないわよ。あなたたちがクエストへ行った後でクエストがBランクになったから報酬金とかも上がったのよ。」

そっぴゃそんなこと言ってたっけ。祐樹きつと喜ぶだろうな。

「その紙を誰かに渡せば換金できるわ。」
「は？」

「それってどういうことですか？」

「ここのお金はギルドの中でしか使えないのよ。だからここからお金が出て行くことが無いから、このギルドの中の総額は変わらないの。その紙を誰かに渡せばお金に換えてもらえるし、その変えてもらった人も誰かに渡せば換金できる。その紙は簡単に言えば利子がつかない貯金ってところしらねえ。」

「ここの中でしか使えなかったら、外の世界に出たときはどうするんですか？」

「あれ？もしかして知らないままクエストに行ったの？」
「なんか小ばかにされた気分だ。」

「クエストに合わせて食事代とか宿泊費とかは向ここの受付でもらえるわよ？」

もつと早く言ってもらいたかった。

もしも安部さんが僕たちにお金をくれなかったら飢え死にしていたのに…

勝手に深いため息が出た。

「クエストの報告はどこですればいいんですか？」

リリーはびっくりしたようだった。

「あなた真面目ねえ…したければアリスにきて。全部話しても、話さなくても、こういう風でもいいのよ。」
「適当だなあ。」

「ありがとうございます。」

僕はアリスのところへ向かう。

「あつ竜。よく眠れた？」

「はい。クエストの報告にきました。」

僕はクエストであったことをすべて話した。

話がベインのところに差し掛かったとき、アリスが声をあげた。

「ベインに会ったの!？」

動揺しているのが分かる。

「祐樹はベインにやられたのね…」

「でも…どちらかと言うと助けられたんです…」

アリスがよく分からないという顔をしている。

「僕たちは…もしベインが来なかったら死んでたと思います…」

「それは結果であって、あいつの目的じゃないわ。」

なぜか、悔しそうで、哀しそうで、懐かしそうな気持ちが伝わった。

「あいつは…絶対に自分のために動いている…そうじゃなくても、

祐樹をあんな目にあわせたからには絶対に許さない。」

それも含め、世界壊滅を阻止せねば…

「いつか絶対に仕返ししてやるわ。」

「僕も絶対に祐樹の敵を討つ！」

多分祐樹がここにいたら、僕まだ死んでないけど！>って言われそうだな。

「そうね。」

アリスの顔が穏やかになった。

「それでアリスに頼みがあるんだけど…」

「分かってるわよ。強く、なりたいんでしょ？」

僕は自分の顔が緩んでくるのが分かる。

「いいわ。本当はクエストで力をつけるんだけどね。」

「お願いします。」

「そんなに畏まらなくてもいいわよ。なんか竜、帰ってきてからずっと堅いわよ？」

みんなにはそうやって映ってるのか。

「つらいのは分かるけど、引きずっちゃダメなの。もっと強気になつて！」

「強気ですか…どうやって？」

「そんなの自分で見つけなさいよ！それが難しかったらまず自分のこと<僕>じゃなくて<オレ>とでも呼びなさいっ！」

なんか躡けられている感じがする…

「オレ…ですか。」

なんかむず痒いと言うか恥ずかしい…

「そうそう！あとは自分次第よ！」

そりゃそうだな。よし、強くなればこんな思いしなくていいんだ！強く、強く。

「じゃあ行くわよ。」

「は…」

返事をするまでに外に来ていた。アリスの力はいいなあ…

「聞きたい事があるんだけど…」

「手短にお願いね。早く修行に励みたいから。」

僕は頷いて話し始めた。

「昨日のクエストで、戦闘が始まったときに周りが黒ずんだ紅のよな色で包まれて、みんな動かなくなっただんです…あれって何ですか？」

「あれは紅界^{こうかい}よ。紅界を張ると、現実の時間と切り離されるの。そこで物とかが壊れても紅界を解けばすべて元に戻るわ。紅界にかかっていなかったところはベインがサービスで直してくれたのよ。」
そのままにしておいたほうがベインにとって都合が良いのではないのか？

聞いたら、ベインの目的は世の中を乱すことじゃないわ。と言われ

た…

ベインはなんで世界壊滅を望んでいるんだろう。

「あと、なんか風の球みたいな術のことベインは風球ふうきゅうって呼んでたんだけど…」

「ああそれは術の名前よ。雷の球とかは雷球らいきゅう、火の玉は火球かきゅう、水の球は水球すいきゅうって言うの。」

ちなみに水球というのは言うまでも無く、競技ではない。

「私があなたたちと戦ったときに出した剣のようなものは、雷刀らいとうよ。他にも 刀で術の名前は統一されているわ。」

術にも名前ってあるんだ。

「他の術はオリジナルとかが多いから名前はそれぞれ違うの。もちろん一緒のものもあるけど、そんなの話してたら日が暮れるわ。そんなことよりさっさと修行するわよ！」

「はい！…でもどうやって。」

「まずあなたは術について知らなさ過ぎるからそれを教えなきゃね。」

「…なんだか長くなりそうだ…」

前向きに…（後書き）

スイマセン。

無の属性と異の術についてかけませんでした。
次こそ書きます。

琢磨

「えつとね…」

会話にするとキリがなさそうなので、簡単にまとめることにしよう。まず、術には発動するための力が要る。その原動力のことを魔力と呼んでる。

魔力が多い人ほど強くて、魔力が多い人ほど術がたくさん出せる。しかし、いくら魔力が多いと言っても、魔力の配分をうまくできなければ意味がない。

配分は、アリスとかノワールとかのレベルになってくると、術に消費するだけで済むそう。

でも魔力の扱いが下手な人は術の消費 + 無駄な力を使わなくてはならない。

僕と祐樹は魔力は多いほうだ。（アリスが言うんだから本当だろう。）

特に僕は魔力だけなら、アリスに「私に劣らないわ。」と言われた。ただ、それと同時に、アリスに「魔力の扱いが下手だね。」とも言われた。

そこで魔力の扱い方を教えてくれるらしい。

また、魔力の扱い方って言うのは術の力にもかかわってくるそう。扱い方がうまい人は力を研ぎ澄ませて攻撃するから、弱い術でもとても威力がある。

それと人によって魔力の質は違うようだ。

ベインとアリスを比べればすぐに分かる。

「まあこんなところかしら。」

一通り説明が終わった。

「ずっと気になってたんですけど、無の属性の人は少ないって言うてませんでした？」

「ええ、言ってたわ。」

あつさりと言うが、矛盾しているのではないか？

「でもなんか基本の四つの力を使う人よりも特別な力を使う人のほうが多くないですか？」

アリスは考え込んでいる。

「私が説明不足だったわね。」

はあ…っとため息をついた。

「いやっ…そんなことは…」

焦ってフオーしようとするアリスが吹き出した。

「いいのよっ！それより帰ってきて初めて、竜らしかったわねっ！」

「そうですか…？」

アリスは笑顔で頷くと、話し始めた。

「無の属性って言うのはその人の属性なの。異って言うのは術の種類。異の術でも掠り傷を治す程度の治癒とか、簡単なものは無の属性が無くたって使うことはできるわ。難しい術は使えないけどね。」

あなたは、きつと原子の扱いだけでやっていけると思うけど…
ぜび治癒の術も教えてほしいんだけど…

まあ、あとで覚えればいいか。

「時間を停止させるのは難しいんじゃないですか？」

安部さんのことを思い出す。

「ん…なんて説明したらいいかな。簡単に言うとね、自分の属性と術とでシンクロする値があるのよ。自分の属性を100に分けたとすると、私は無の属性が45、風の属性が25、火の属性が15、水が10、雷が5つてくらいかしら。」

まてまてまて…100に分けた自分の属性のうち、雷の属性は5しかないってことは、最大で術とのシンクロは5だよな…

消費税も馬鹿にはできないね…

「僕たちはどうなんですか…？」

「僕じゃないでしょ！オレ！」

そうだった…慣れるまで大変だ…

「祐樹は前にも言ったとおり100に分けた自分の属性のうち、1

00が雷よ。でも術とは最大で50までしかシンクロしてないわ。宝の持ち腐れよ。」

結構サバサバと言うもんだ。

「でもあなたはもつと宝の持ち腐れよ！持ち腐れというより、宝の不法投棄だわ！まったく…」

力を自分のものにしていないことよりも、アリスの言葉のほうダメージが大きい…

頭の中で宝の不法投棄という文字がぐるぐると回っている。

「あなたはね、自分の属性を100に分けると無の属性が100なのよ。」

はい？

「みんなの基準だとね。」

「どういうことですか？」

「あなたの力のすべてを100に分けると、無が60くらいで他は10つてところね。でもあなたはとも魔力が多いの。そして強力な魔力を持っている。あなたの60は祐樹の100とほぼ等しいわ。」

実感がない。

「ともかくあなたは強いの！力を自分のものにできればね！」

「そうなんですか。それで、なんでほとんどの他の人は異の術を使えるんですか？」

アリスが目を瞬かせている。

「竜？」

「はい。」

「あなた私の話聞いてたの？」

「はい。」

あっさりと返答する。

「あなた祐樹より馬鹿ね。」

ガン…

今度は祐樹より馬鹿という言葉が頭の中を回る…

「自分の属性を100に分けたら純粋な属性を持っている人以外は無の属性が少しはあるのよ。」

あ…そうだ。

「だから、その小さな無の属性を使って異の術を使ってるの。あなたたちが戦った敵は少し無の属性の割合が大きかっただけよ。」

ああ…祐樹より馬鹿かも…

「みんな自分の属性のなかで30以上あるものは1つしかないの。1人を除いてね。それがその人の主な属性となるわ。」

祐樹より馬鹿…祐樹より馬鹿…

「ちよつと！聞いている！？」

「はい…」

力無き返事を返す。

「もう…強くなりたいんでしょ！」

「はい！」

力を込めて返事を返す。

「よし、じゃあ修行するわよ！」

「はい！」

「はい、はい、うるさいわ。」

「すいません…」

ぐさつと心に來た言葉…本日3度目…

「じゃあ始めるわ。まず、地面を分解してみて。」

手をかざそうとしゃがむ。

「待つて。」

「え…しゃがまないと無理ですよ。」

はあ…アリスは深いため息をついた。

「簡潔に修行の内容を言っておくわ。1つは魔力の配分をうまくできるようになること。もう1つは想像力をつけることよ。」

想像力？

「なんで想像力があるんですか…？」

「ホンツと馬鹿ね。」

ぐっさ……四度目。

慣れてきてしまった…そんな自分が悲しい。

「想像して創造するのよ。」

よく分からなかったが、もう聞く勇氣は無い。

「まず…何をすればいいですか？」

「まずは魔力の配分をうまくできるようになってもらっわ。配分がうまくできるようになれば遠くのものとかも分解したり遠くで構築したりできるようになるから。」

「でも…せいぜい分解できるのは50cmくらいの距離じゃないと…」

「その距離を伸ばすための修行でしょ。いくら良い人材でも磨かないと輝かないわ。頑張りましょ。」

きつと厳しい修行になるんだろっなあ…

こっちを見てにっこりとするアリス。

きれいな笑顔がまた悪魔に見えた…

琢磨（後書き）

ご朗読有難うございました。

無の属性と異の術について分かりにくい説明でスイマセン。
理解していただけたら嬉しいです。

イメージ

はあ…つまんないや…

動かないと、こんなにつまらないものなんだ…
かといつても動くところあまりできない。

はあああ…

「こんなんじゃ余計体に悪いよお…」
ぐっ…

傷が疼く…

この傷、毒でも入ってるんじゃないのか…

竜はなんか修行してるっぽいし。

置いてかれたら怖いなあ…

はあああああ…

「ほらほらっ！もつと気合込めて！」

「んぐぐぐぐううう…」

立ったままの状態で地面を分解しようとする。

少しだけ地面が消えてきた。

「その調子よ！もつと力を練り上げて形成まで持つてく！」

精一杯の力を出している…つもりだ…

原子を立方体に組み立てる。まだ完璧ではないが、ぼんやりと形が
できてきた。

よし。

あ……崩れた。

「こらっ！気抜いちゃだめでしょ！」

「ふう、…ふう…はあ…アリス…これ、逆に無駄な力、使ってる…

気、するんだけど…」

僕は…じゃなかった…オレは地面に大の字で倒れこむ。

空はとても澄んでいる。とは言え、真っ白だが…

「その無駄な力を使わないようにすれば、きっとできるわよ。そのための修行だし、いきなりできるほうがおかしいわ。」

そのとおりだ…

「なんか、コツとか、ないんですか…？」

「コツねえ…」

アリスが考えているうちに息を整える。

「コツは人や、術によって違うわ。私は…そうね。昔、新人だったころは、空气中に真っ直ぐできれいな直線を頭のなかに描いて、そこから張り裂けるようなことをイメージしたわ。」

「それってアリスの術限定ですね…」

「そんなことは無いわよ。あなたの場合だったら術をかけるものと、自分を細い直線で結んで、そこに力を流し込むようにするのをイメージしたらどうかしら？」

おお！それはいい考えだ。

「あくまでも私のイメージだからあなたに合うかどうか分からないわよ。」

「やってみます。」

「細いほうが力の量が少なくて済みそうな感じがするわね。」

なんだか滅茶苦茶な理論だが、細い糸を想像する。

僕の手と、床を細い糸で結ぶ。

もちろん、曲線にならないように真っ直ぐをイメージする。

そつと糸が切れないように力を流し込む。

え？

「うわっ！」

「っきゃっ！」

力が地面に到達したときだった。

突然、僕たちの立っていたところが半円状になくなっていた。

「ちよっと！ちゃんと力の制御しなさいよっ！」

「ゴ…ゴメン。」

さつきアリス、「きゃあ」って言ったぞ…

あまりにも似合わない…

「私のイメージがあなたのイメージにピッタリだなんて…よかったわね！」

嬉しくて、思わず口元が緩んできた。

「あとはぼ…オレが力を制御するだけですネっ！」

アリスがふふつと笑う。

「今日はここまでにしましょう。しっかり寝て、魔力を回復しなさい。明日に備えてね。」

イメージ（後書き）

最後まで読んでくださり、有難うございました。
次回も修行の続きです。

徐々に力を使えるようになっていきます。
見守ってやってください。

和やかな時間

竜をつれて本部に戻った。

竜は何やら料理人と話しているようだ。

彼のほうは順調ね。

祐樹が心配だわ。

きつとベインの術のことだから治りが遅いわね…

でも…治るんだから気長に待ちながら、竜を強くしていきますか…

つうまああんなああい！

「あゝ！もう限界っ！」

そーいやクランが遊びに来てって言ってたっけ。

遊びに行こう！

部屋を飛び出すと、クランたちの部屋を探す。

確か…0805室って言ってたっけ？

我ながらナイス記憶力っ！

つつ……腕がたまに痛む…

でも我慢、我慢。

おっ発見！

部屋をノックする。

「はい。ちょっと待って。」

ん？クランじゃないぞ…

ドアがぱつと開く。

「どなたかしら？」

出てきたのはヘレンだった。

「こんにちわ。クラン…いるかな？」

「クランは今どこか行ってるわよ。確かあなた祐樹君だっけ？どう

ぞ、入って。」

「お邪魔しまあす…」

女の子の部屋に入るのは初めてだ。緊張するなあ。

「ソファーにでも腰掛けて。あたしお茶入れてくるから。」

言われるがままにソファーに座ってあたりを見渡す。

正直言って僕たちの部屋とそんなに変わらない…

「そつえば、昨日の怪我大丈夫？」

お茶を運びながら聞いてきた。

「うん。平気だよ。たまに疼くけど…」

「あんまり無理しちゃダメよつ。」

心配してくれているようだ。嬉しいな。

「祐樹君って確かあたしと一緒に、雷の属性よねっ？」

「うん。あんまり使い方がわかんないけど…というか祐樹でいいよつ。」

「そつか。でも使い方なんて自分で考えればいいんじゃない？」

確かにそうかも…

「あとは修行してうまく術を使えばそれでいいじゃないっ。」

ヘレンがにこやかに笑う。

初め見たときよりも、近くで見るとずっとかわいい。

「どうかした？」

思わずはつとする。見とれてしまっていた。

「いや、なんでもないっ！」

焦ってドキドキする。

「祐樹って面白いね。」

ああ…もう死んでもいいかも…（よくないっ！）

「祐樹はなんでこのギルドに入ったの？」

「ん…僕のせいで竜を巻き込んだんじゃったんだ。」

竜のPCを勝手に触って、ベインの空間に入ってからアリスに拾われた（さらわれた？）ことを話した。

「そつなんだあ…インターネットも危険がいっぱいねっ！」

笑顔で切り替えしてくるけど、＜危険がいっぱい＞では誤解を招いてしまう。

まあいいか。

「ヘレンはどうして？」

笑顔が急に消えて、悲しそうな顔になった。

「あつゴメン…：いたくなかったらいいんだっ。」

あわてて付け加える。

「あたしは…：分からないの…：」

すぐく重い空気が流れて、部屋が静まり返る。

再びヘレンが口を開いた。

「あたしね、このギルドに入る前の記憶が無いのよ。それまでどうやって生きていたかとか、まったく覚えてないの…：」

悪いことを聞いてしまった…：

「ゴメン…：変なこと聞いちゃって…：」

「いいのよ。今はここの記憶があるから。」

ヘレンの笑顔はさっきよりつらそうだった。

それから色々話した。

竜がどうか、クランがどうか、好きなものは何とか、どんなクエストやったかとか。

「あなたたちタッグ名は何にしたの？」

「えっと、竜が無属性で、僕が雷属性だから、無雷むらいにしたんだっ！」
自身満々で答える。

「え…：あ…：いい、名前ねっ！」

なぜかヘレンの反応がおかしい…：

「どうしたの？」

ヘレンが、言い難そうに言った。

「無雷むらいだと…：まるで雷がないみたいじゃない？」

僕は顔から火が出るかと思った。

竜の意図を気づかせてくれてありがとう。

今度一発殴ってやろうと心に決めた。

しかし、まずこの空気を直してほしい…

そんなこんなで、楽しく過ごしていたらだいぶ時間がたっていた。

「僕そろそろ戻んなきゃ。」

「そう。また遊びにきてね!」

ヘレンと話せた。感激だ!

それにしてもかわいかったなあ…

また遊びに行こつと!

「本つ当に申し訳ありませんでした!」

「いいよいいよつ。こうやってお金返してもらったことだし。これからよろしくね。」

ふう…これで祐樹のツケが無くなった。

あいつとんだだけ食ったんだ…

手元には100000Fあったはずだが、桁が変わって100000Fになっている。

これのどこが平等だ…

仕方ない。あいつ、頑張つてたしサービスしとこつ。

部屋に戻ると祐樹はいなかった。

怪我してんだから動くなよな…

あいつはあいつなりに何かしてるのかな?

まあいいや。オレは祐樹の親じゃないし。

さつさと寝て、明日の修行に取り組むぞつ!

和やかな時間（後書き）

最後まで読んでくださって有難うございました。

今回は修行を書くつもりでしたが、下手な言葉の使い方しかできず、文が長くなってしまったので変更しました。すいません。

おいしくない…

翌日：

ここで寝るのは3回目くらいだが、毎回のことながら違和感を感じていた。

それが今回ようやく分かった。

多分、寝ている時間が常に一定だ。

なぜ余計なことに気がつくのだ…

起きてぼ…オレの部屋から出たが、祐樹はやっぱり居ない。寝ているのだろうか？

シャワーを浴び、ロビーへ行くと、いつもどおりアリスがいた。

「準備はいい？」

「もちろん。」

そう答えたところには外だった。

「さて、はじめるわよ！」

アリスは一体いつ寝ているのだろうか…

「今日は何をするんですか？」

「決まってるじゃない！昨日と同じよ。」

またか…

3時間ほど練習して、やっと少し制御できるようになった…

「よし、じゃあ今日は終わりね。」

「え！？もうですか！？」

「1日3時間までにしとかなきゃ体壊すわよ。」

気使ってくれてるんだ。

「また明日お願いします。」

本部に戻った。

なんかこれから暇だな…

1人で行けそうなクエストでも行ってみよう。

「ふぁあ〜…」

目覚めると、竜はいなかった。

「ん〜…修行でもしてるのかな？」

この忌々しい傷さえ早く治ってくればいいのに…

さすがに2日連続でクランのどこ押しかけると迷惑だよなあ…

今日は部屋でおとなしくしていよう。

クエストボードを眺めながら一人で行けそうなクエストを探す。
これならいけそうだ。

ランクD

<依頼内容>

私、イノシシ汁を食べたくなくてしまいました。
しかし、イノシシは怖くて狩れません。
どうかイノシシ狩りを手伝ってください。

契約金 200F

報酬金 1500F

感謝金 契約金×2 + いっしょにイノシシ汁を食べましょう。

イノシシ汁というものが食べられるかどうかは置いておいて、イノシシの討伐だけだな。
簡単そうだ。

「こんにちは。用件は？」

机が話しかけてくる。

「クエストに行きたいんだけど。」

「かしこまりました。」

場所は…どこだ？

日本じゃなさそうだ。

「アリス…は…いないな…」

周りを見渡す。

「すみません。これってどこですか？」

目の前にいたリリーに聞く。

「まあどこでもいいんじゃない？」

なっ…何て適当な…

「はいこれ。」

渡されたブレスレットは、前にもらったブレスレットとは色が違った。

「タッグで行くときと個人で行くときは色が違うのよ。他は変わらないから安心して。」

「言葉…通じなかったらどうしましょう。」

「そのブレスレットが翻訳してくれるわ。」

おお。便利なものだ。

「ありがとうございます。」

次に、こと反対側に歩いていく。

「すみません。クエストに行くのでむこうの世界のお金受け取りたいんですけど…」

「ランクは何かね？」

知らないおじさんが応えてくれた。

「Dランクです。」

机の中をがさがさと探している。

「はいよ。」

一万円札が渡された。

「ありがとうございました。」

よし行くか。

<出る>

心の中で念じた。

体が軽くなった。

着いたのは…山奥？

「やあ、待っていたよ。早速だが、イノシシを狩りに行こう！」

「はい。」

早速イノシシを発見。

「ぎゃああああ！」

何！？依頼主が僕の後ろに隠れよったぞ！

「仕方ない、修行の成果を見せてやる！」

床に手を向けて、細い糸をイメージする。

「ぎゃあああ！来る！来る！」

「え？」

バコーン！

「いつてえ！」

「ちよつと！何やってるんですか！？早くたおしてくださいよっ！」

術の発動までに時間がかかりすぎるなあ…

次はそこを練習しよう。

「失礼ですが、あなたのその背中の銃をお借りしてもよろしいですか？」

「いいよいいよ！早くしてくれ！」

イノシシがこちらを見て、走る構えをしている。

さて、

「この銃ってどうやって使うのですか？」

オレは世の中じゃまともに生きてきたほうだ。

無論、使い方など知るはずがない。

「ぎゃー来るっ来る！」

「早く使い方を教えてください！」

「貸して！」

依頼人は逃げながら銃を構える。

ドカーーン！

見事に腹に命中する。

何発か打ちまくる。

イノシシが動かなくなった。

「おめでとうございますっ！」

「なっ何言ってるんだ！？君は結局何もしてくれていないじゃないかっ！」

泣きながら叫びまくる。

「そうですね。でもこれで、これからいつでもイノシシ汁が食べられるじゃないですかっ！」

多分オレの笑顔は、そこで喚いている人にとって悪魔に見えたことだろう。

その後、彼の家へ行ってイノシシ汁を食べたが、微妙だった。

「ありがとうございました。」

帰り際に、キーを渡してきたが受け取るのを拒んだ。

だって何もしてないし、自分の力の弱点が分かったからそれだけで十分だ。

< 入る >

心の中で念じると、体が軽くなる。

ついたのはいつもと変わらないロビーだった。

おいしくない…（後書き）

読んでくださり、ありがとうございました。

今回はのほほんとした感じの雰囲気を漂わせてみました。

回復、始動

そんなこんなで2週間ほど修行とクエストを繰り返していた。この所、祐樹とはまったくあつてない。

今日もいつもと同じ修行のつもりでアリスと外へ移動する。

「そろそろ力の制御も、術の発動時間の短縮もできてきたところだし、今日で最後ね。」

「もう終わりですかっ!？」

アリスはあきれたようだった。

「分かってないわね。クエストはお金を集めて道楽するものじゃないの。お金を集めるためにクエストがあると初めに私は言ったかもしれない。でも、それは結果であって目的ではないのよ。」

よく意味が分からない。

「本当の目的は力をつけて、ベインの陰謀を阻止することだって!」「そついや、そうでしたね。」

忘れていた。でもオレの目的は違う。誰にも傷ついてほしくないことだ。

「だからもう、クエストで力をつければいいのよ。あとは…」

あとは…なんだ?

「私が初めに言ったこと覚えてる?」

「たしか、魔力の配分の仕方を修行するって…」

「もう1つ言ったはずよ?」

なんだったつけ……

思い出した!

「想像力…ですね。」

「そうよ。なぜ必要か分かる?」

「想像を創造する…ため?」

「分かっているじゃないっ!」

いや、言っておこう。

アリスが前言ったことをそのまま言っただけだ。

「無の属性の人には想像力がとても大切になってくるのよ。特にあなたのような力の子にはね。」

「力だけではダメってことですか？」

そのとおりと言う顔をするアリス。

「あなたは治癒の術とかなんないのよ。」

「え！？でも…誰かを助ける力がほしいんですけど…」

「だから、想像力が必要なのよ。」

ピンと来ない。

「例えばここで傷ついている子がいるとする。その子を助けるにはどうする？」

「ギルドへ戻る…」

「違うわよ！」

アリスがむきになっている。

「あなたが助けるの。あなたの力でね。」

「治癒の術なんて知りませんけど…」

「傷口を原子で分解して元の皮膚に再構築すればいいじゃない。」

あ…

「そうすれば元に戻るわ。」

「それって…」

「そう、誰にも劣らない治癒の術が使えるようになるわよ。」
「につこりとするアリス。」

「でもこれはあくまでも私の想像よ。だからあなたの想像を、現実とするの。分かった！？」

「はいっ！」

僕は神に嫌われて力を授かったと思ってた。
違った。

きっと僕は神に愛されているんだ。
なんて素晴らしい力だろう。

「これで修行は終了よ。また、本当に力が必要になったら来なさい。」

「
「ありがとうございます！」

なんでだろう…この頃竜とまったく会わないなあ…

ヘレンが言うには、睡眠時間は、1度寝ると6時間ぴったらしいから寝る時間がずれているのだろう。

傷の痛みもほぼ無くなった。

よしっ！竜と一緒に修行に励むかつ！

本部に戻ると、祐樹が居た。

「祐樹っ！なんか久しぶりだなっ。」

「うん！目が覚めると竜、いつもいないんだもん。」

久しぶりに見た祐樹は何も変わっていない。

「竜、なんか雰囲気変わった？」

「ああ…うん。ちょっとかわったかもね。」

まだ強気になるのは慣れていない。

「そっだ！そろそろ傷が治ってきたから、僕も修行に付き合わせてよっ！」

目を瞬かせて、アリスと顔を見合わせると、吹きだしてしまった。

「ゴメンっ祐樹。今日ちょうど修行が終わったところなんだ。」

「え。」

呆然とする祐樹の顔が目映る。

笑いを必死にこらえた。

「僕だけ置いてけぼりじゃないかつ！」

むきになって話す祐樹はホントに何も変わっていない。

「大丈夫だって。今度アリスに特訓頼めばいいさ。」

納得したのか、静かになった。

「明日か明後日にはクエスト行こうな。」

笑顔になる祐樹。

「当たり前じゃないかつ！」

「ん」。我ながら自分の作り出した空間の中で見る月は美しいねえ。

「会議でもしているのだろうか。」

丸く並べられた椅子はそれぞれ種類が違う。

空中にモニターが映し出される。

「あの子達は順調ですねえ。」

「そうね。いずれ大きな力となってくれるでしょうね。うふふ。」

不気味な雰囲気。

「何でベインってば、あの子達ばっか見てるのっ！？僕だって強いじゃんっ！」

子供がベインのひざの上で拗ねている。

「キューブ。君には戦う必要がないのだよ。私たちファミリーは子供を前線に立たせるようなことはしないさ。」

につこりするキューブ。

「じゃあ、死んでもいい子がほしいんだねっ！」

口元だけで笑う。

「そうだよ。いい子だ。よく分かってるじゃないか。」

「いつまであの子に纏わり着くつもりだ？」

男が声をかける。

「纏わり着くとは嫌な言い方だねえ。NO8の男、クリアよ。」
対抗するように嫌味を言うベイン。

「オレがNO8でとどまっているのは、単に8と言う数字が好きだ

からだか、文句あるか？」

「ちよつとやめなさい！」

「なかなか賢明な考えだよNO7、ローズフィリア。」

女は冷静に対処する。

「私たちはファミリィです。仲間内で喧嘩しても仕方ありません。」

「喧嘩なんてしないよお！ベインは仲間を傷つけたりなんてするもんかつ！」

不気味な笑いをするベイン。

「やっぱりキューブはよく分かっている。私は仲間には手を出さない。安心してあの子達を見守りなさい。ゆつくりとあの子達が絶望していく様を見ようではないか。」

月が闇の中で笑っていた。

回復、始動（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。
修行もやつと終わり、クエスト再開です。

ベインたちは何をたくらんでいるのでしょうか。

黒い薔薇

「うわっ！」

ぐさっ。刺のようなものが祐樹の周りに突き刺さる。

「祐樹、最後だからって気抜いちやだめだ！」

「分かってる、気なんか抜いてないっ！」

周りは紅界が張ってある。

修行で紅界の張り方は教えてもらった。

「ふふふっ…よく避けてるわねえ。」

気味の悪い、黒い薔薇が話した。

「お前、動けないんだろ！？」

槍のようなものを薔薇に向けて飛ばす。

「あら、そんなこと無いわよ。」

下からツルが出てきて打ち落とされた。

「体自体は動けないってことじゃん！」

後ろに周り込んでいた祐樹が雷球を放つ。

「だからそんなこと無いってば。」

ツルが薔薇を持ち上げる。

「空中じゃ身動きできないでしょ！」

「しまったっ！」

祐樹がもう一度、さっきより力をためて雷球を放つ。

「なんちゃってね。」

薔薇の前にはツルを編んで出来た、網のような盾で防がれた。

「防がれることなんて百も承知だよっ！」

オレはすかさず槍を飛ばす。

もちろんさっきより全力で。

「いっけえーサウザントスパア！」

「きゃああああ！」

やった。薔薇はすぐに朽ちていく。

「おのれえ……」

薔薇が消滅した。

「ナイス竜っ！」

こちらへ駆け寄ってくる。

「お前もナイス陽動だったぜ！」

「ありがとう。でも竜、サウザントスピアはないんじゃない？」

少し引いている祐樹。

恥ずかしくなる…

「うるせーっ！」

紅界を解く。

「ありがとうございました。あの薔薇があんな怪物だったなんて…」

オレはキーを受け取る。

「いえっ！困ってる人が居たら、例え無償でも働きますよっ！」

おじさんは苦笑いしている。

「では失礼します。」

<入る>

と念じた。

さて、なぜこんなことになっているか。

オレは修行がやっと終わり、祐樹と一緒にクエストを探していた。

そのときに、アリスから「あなたたちにCランクのクエストで頼みたいものがあるの。このクエストがうまくいったら、Cランク術者として認めてあげる。」と言われた。

祐樹は大喜びで、オレも、不安もあったが嬉しかった。

そして、それと同時に「危険なクエストになるかもしれない。気を引き締めて。」とも言われた。

内容はこうだ。

ランクC

<依頼内容>

全国各地で黒い薔薇が見つっています。

その薔薇は一見、美しいだけに見えます。

しかし、その薔薇を採ろうと手を伸ばしたとき、噛み付いてきたのです。

この世の理から離れているものだと悟りました。

その薔薇のせいで、死んだ人さえあります。

被害は深刻なものです。

世界がパニックに陥る前に、すべての薔薇をどうにかしていただきたいのです。

契約金 1000F

報酬金 1つの都道府県につき、50000F

感謝金 契約金×5

場所は日本だった。

この依頼をアリスは深刻に受け止め、1つの都道府県に、1タッグの術者を向かわせた。

1つの都道府県に責任者1人がいるからその人の言うとおりに動く。

「絶対死んじゃだめよ。」

最後にそう言われた。

なぜか、その言葉がとても重く感じられた。

本部に着くと、怪我をしている人がたくさんいた。その中に、克蘭とヘレンもいる。

ほとんど無傷なのは僕たちだけだろう。

克蘭は軽症だが、ヘレンは腕に深い傷を負っている。

「ヘレン！大丈夫！？」

まさか、一番に駆け寄っていくのが祐樹だとは思わなかった。というか、いつの間にそんな親しくなったんだ。

いや、そんなこと言ってる場合ではない。

「克蘭、大丈夫っ！？」

僕も素早く駆け寄る。

「私は平気よ！でも、ヘレンが、ヘレンが私を庇って…」

克蘭は泣いている。

「克蘭！何言ってるの！？あたしは重症かもしれないけど、死ぬことは無いから大丈夫よ。泣かないで。」

怪我をしているほうがしてないほうを慰めるのは変な光景だ。

「ホントに大丈夫？」

祐樹の真剣な顔を久しぶりに見た…

ヘアリーは他の怪我人を治すことで手一杯だ。よし、修行の成果を發揮するぞっ。

「祐樹、ちょっと退いて。」

「何するんだよっ！」

「治すんだよ。文句ある？」

祐樹はおとなしく退いた。

手を傷口にそっとかざして、細胞を作り直す。

予想以上にうまくいった。見る見るうちに怪我は治っていく。

「うわぁ…竜っ！ありがとっ！」

克蘭が飛びついてきた。

「っちょ…」

恥ずかしくて戸惑う僕を無視し、泣きながら何度もお礼を言うクラ

ン。

ヘレンは腕の調子確かめているようだ。

「竜、いつの間に治癒の術覚えたの!？」

祐樹は嫉妬しているようだ。

自分の性格の悪さがこういうときによく分かる。

「教えてあげないっ!」

「っちえ。」

「竜、ホントにありがとう。助かったわ。これですぐクエストに戻る。」

え？

「もしかして、ヘレンってクエストの途中で帰ってきたの？」

祐樹が探るように聞く。

「いえ…一応すべての薔薇は破壊したわよ。」

「じゃあどうして？」

克蘭があとを引き継ぐ。

「薔薇が増殖してるらしいのよ。私たちが倒したあとで、また依頼が来たようなの。」

「祐樹、もしかして愛知県も増えてるかも!」

「ええ。そのとおりよ。」

後ろにはリリーがいた。

「みんな!静かに聞いて!」

ロビーにいたみんなが静まり返る。

「Ｃランクの薔薇のクエストで、今から言う都道府県に配属されていた人はもう一度向かって!」

リリーが都道府県を読み上げていく。

「……………以上。呼ばれなかったところは傷の手当てをしながら待機!」

静まり返ったロビーがどつと騒がしくなった。

「僕たちのところ…まただね。5体も倒したのに…」

「おう…何が起きてるんだらう。」

「僕たち行かなくちゃ。ヘレンはどこに配属されてるの？」

「私たちは岐阜県よ。近いわね。」

「つこりとしたが、県と県は案外遠いことを知らないのか？」

「祐樹、行くぞ。」

オレはもう行く準備をしていた。

「分かった。共に無事であることを祈ろうっ！」

祐樹がこちらへ来た。

<出る>

そう念じた。

「始まったかね？薔薇の侵略は。」

「あの子達が順調なように、こちらも順調よ。」

ローズフィリアが答える。

「なんせ2週間もあつたからな。他のものたちも準備は出来ているだろう。」

みな無言だ。

「返事がない、と言うことは準備万端ということで進めさせてもらうよ。」

「もし準備が出来て無くて、僕たちは止められないよっ！」

キューブが笑う。

「準備が出来ていなければ、今のうちにしとけばいいさ。」

ベインはワインを飲んでいる。

「ローちゃんのあれって意味あるの？」

小学生くらいの子がゲームをやりながら聞いた。

「私のことローちゃんって呼ぶのやめてよねっ！それにちゃんと意味あるんだから！」

「あゝあゝ死んじやったあ。まあいいや。」

「ちよつと聞いてないじゃないっ！」

なんだか賑やかだ。

「ゲームばかりしてないでちゃんと準備をしろ。お前が準備を怠っているのは分かっている。」

少しお怒り気味なクリア。

「クリアは真面目すぎるんだよ……」

「いや、クリアの言うとおりだ。ちゃんと任されたことは果たす。

それがファミリーの掟だろう？」

「はあゝい。」

少年はどこかへ消えた。

「計画は順調だ。この世にもそろそろ移動する準備をさせないとな。」

黒い薔薇（後書き）

最後まで読んでくださり、有難うございました。

大変なことになってきましたね。

自分で言うのもなんですが、初めのころに比べてだいぶまとまて書けるようになって来た気がします。

これから戦闘続きとなると思っているので、これからもよろしく願います。

ユニオン

さっき来たときと同じ場所に着いた。

「うわっ！さっきより、10体くらい増えてるよ！」

「ああ…一匹ずつ倒して回ろう。」

安部さんとの戦いがあってから、オレたちは魔力を察知できるようになった。

だから薔薇がいる場所や、大体の数は分かる。

「どこから行く？」

「一番近いところから効率よく。」

走っていると、だんだん薔薇に近づいているのが分かる。

「近いよ。」

「分かってる。」

周りを見渡す。

「あつた！」

祐樹の掛け声と共に、紅界を張る。

その黒い薔薇は紅界を張ったとたんに、変化した。

徐々に大きくなり、やがてさっき戦った相手くらいの大きさになった。

「あゝあ…見つかったやつだ。」

お遊びのようなセリフだ…

出来る限り不意をついて破壊したかった。

「竜、あんまり飛ばしちゃダメだよ。まだたくさんいるから…」
分かってる。

小さな声で、最速で、出来る限り力をあまり使わなくて良い作戦を立てた。

「何こそこそ話してるのよ。」

ツルをムチのようにして攻撃してくる。
かわした。

オレはすかさず薔薇の後ろへ回り込む。

祐樹は手に雷刀を持って、その場から動かない。

「そんな短い剣じゃ当たらないわよ！」

ツルのムチで祐樹に攻撃しまくる。

「ぐ……」

祐樹はすべての攻撃を防ぎきれていない……

急がないと……

あと少し、あと少し……

着いた！

あとは鉄の原子を集める……よし、鉄球ができた。

「祐樹！ いいぞ！」

合図と共に薔薇に向かって走ってくる。

オレと薔薇は一直線上にいる。

「いつけー！」

祐樹が薔薇に向かって雷球を投げつける。

「当たるわけじゃないじゃない。」

上へ飛んで、避けられた。

その雷球はオレに向かって飛んでくる。

鉄球でその電気を吸収する……

その鉄球を、思いつきり、あいつに向けて、

「飛ばす！」

鉄球はあいつに当たる。

「ふ、こんなもの痛くも痒くも……」

鉄球は電磁石となっている。

それに向かって鉄の原子を纏わせた電気の使い手が飛んでゆく。

雷刀が薔薇の体を切り裂く。

「う………」

薔薇が朽ちていき、消滅する。

祐樹が格好よく着地した。

「竜っ！」

駆け寄ってきて、オレの体に祐樹が触れた途端に痺れが消えていく。
「大丈夫？」

「ああ。大丈夫。お前こそ攻撃何発か受けたろ。」
そう言いながら祐樹の傷を治す。

「この作戦は今度から使わないようにしよ…」

そうしてくれたほうありがたい。
ふう…

「あまり魔力も体力も使ってない、このペースで倒してくぞ。」

「無理っぽい…」

ん？

あ…

「そうかもな…」

オレたちは戦闘に夢中だった。

魔力で、敵の強さは大体分かる。

今、倒した敵は僕たちで倒せるレベルだ。1体か2体なら…

「どうしよう…」

周りには、8体の薔薇がいた。

「囲まれた…勝てそうにないな…」

「まだ戦闘に夢中で、私たちに気がつかないなんて、経験不足のハ
ンターってところかしら？」

そいつの言うとおりで。

「さっさと倒してローズフィリア様に報告したいわ。協力しましよ
う。」

ローズフィリア？誰だ？

「竜、まずい！早く逃げよう！」

あいつらは腕を絡み合わせて一箇所に集まっていた。

「合体でもするつもりか…」

「合体されたら多分、勝てない…」

ああ…分かっている。

「魔力の大きさが半端じゃない。」

オレたちは走り出す。

「出来る限り逃げないと…」

「ちよつと待った!」

オレは祐樹を止める。

「逃げて、どうせ追いつかれる。無駄な体力は使わないほうがいい…」

「そうだね…」

立ち止まると、急に怖さが込み上げてきた。

逃げていたほうが絶対に怖くない…

でも、倒さなければ意味はない…

「あら…賢いじゃない。少しは頭がいいのね。」

やっぱり…

薔薇の集合体は、僕たちの逃げようとしていたところに先回りしていた。

「あなたたち遅すぎるわ。普通に走ってたら追いつかれるに決まっているじゃない。」

とんでもない魔力を感じる。

でも…ベインとは比べ物にならないほど小さい…

「なんかさっきまでの面影全然ないね…」

「そうねえ…こっちのほうが…美しいわね。」

祐樹、お前のキモはすごい…化け物と会話しているとは…

いや、見掛けは化け物でないからまだ会話できるのだろう…

「竜…あいつ人型になった…ヘレンに聞いたんだけど、人型はヤバイんだって…知能も高く、移動も早い、そして何よりこの魔力…」

「ああ…人型は危ないことは分かった…次があることを祈って、次から気をつけるよ…」

「ふふっ…次があると思う?」

な…人になった薔薇は僕たちの後ろに移動していた。

「いいこと教えてあげる。魔力を足に集中して動けば、少しは早く

なるかもね。」

あの薔薇は確実に楽しんでいる…僕たちにアドバイスして、長い間楽しもうとしている…

「せいぜい楽しませてよ。」

「君は…なんて名前なの？」

おい、祐樹…この状況で名前聞くことはないだろう…

「名？さつき出来たばかりなのにあるわけないじゃない…」

そりゃそうだ。

「まあ合体して出来たものたちはユニオンって総称で呼ばれるわね。」

「

「そうか。」

「でもあなたたちには関係ないわ。すぐに死ぬんだもの。」

「誰が？」

そのとき、祐樹が一瞬消えた。

そしてユニオンの首を雷刀で切り落とした。

「な…なんで…」

「ユニオン、君が教えてくれたんじゃないか。」

「く…教えるんじゃないかった…まあいい…他にも私のようなものはいくらでも…」

消えた。

オレは何も出来なかった。

「ゆ…祐樹っ！」

「ああ竜、物は試しだねっ…」

聞いたことをすぐに実行するなんて…

「無茶すんなよ…でも助かった、ありがとう。」

くそ…

オレは2週間修行してたんじゃないのか？

何をしていたんだ…

反吐が出る…

実践で何も出来なかったら意味はないんだ。

「ここら一帯の薔薇は無くなったね…」

「ああ…あ！」

まずいことに気づいた。

「どうしたの？」

「最期にあいつが言った言葉……」

祐樹も気がついたようだ。

「他にもユニオンはいる……」

そして、声をそろえて叫んだ。

「クランとヘレンが危ない！」

ユニオン（後書き）

最期まで読んでくださって有難うございました。
戦いはまだまだ続きそうです。
末永く見守ってください。

絶体絶命

はあ…はあ、

「うつ…」

腕に激痛が走る。

「きゃあっ！」

「何よ、この子達。まったく相手にならないじゃない…」
クランが足を捕まれて宙吊りにされる。

「ぐ……………はあ！」

ヘレンは血の滴り落ちる腕で必死に雷球を放つ。

「こんな死に損ないの攻撃食らうものですか。」

片手で弾かれる。

「まさか…ユニオンが相手なんて……………」

絶体絶命の状態だ。

「ヘレンは強いよ…私さえ…私さえ足を引っ張らなければ…」

「ほう…よく分かってるじゃないの。じゃあ死んどく？」

そのとき、クランの足から輝きが放たれた。

「つきや…何よこれっ！」

「クランっ!？」

「大丈夫よヘレン。私がやったんだから。」

ヘレンは啞然としている。

「私ね、いつもいつもヘレンにはかり迷惑をかけて嫌だと思ったの。
竜を見て思ったわ。私が変わらなきゃダメだって。」

「クラン……………」

「だから一番シンクロ値が高い無の属性で、オリジナルではなく、
故人の残していった術を身につけたの。」

「それは…それは何だ!？」

まだクランの足は輝き続けている。

「そんなこと知る前に、あなたは光の速さで死んでくわ。」

克蘭が消えたと同時に、ユニオンは真つ二つとなっていた。

克蘭の手には風刀が握られている。

目で追いつくことが出来ないスピードだ。

ヘレンの元へ歩いていく。

「それは一体…何？」

ヘレンは愕然としている。

「これは光の靴シャイニングフーツよ。光の速さで移動できるようになるわ。でも……」

克蘭が途中でへなへなと座り込む。

「克蘭！？」

「大丈夫…この術は、相応の体力と魔力を使うの。だからあんなやつには使いたくなかった…もっと修行しないと、多用は…ダメね…」
息を切らして話す。

「心配させないでよ……でも借りが出来ちゃったわね。」
にこつとするヘレン。

「私が受けた借りはこんなものじゃないわ。これからもつとしつかり返していくんだから…」

ヘレンが魔力を察知した。

「また…何か来るわ！」

「大丈夫よ…こっちに向かつてるコアは光…どんなに離れてても、どんなに小さくても光のコアは目立つのよ。闇の中の灯みたいだね

…」

くっそ……

もっと早く、もっと早く。

「竜っ！早く！」

「分かつてる！」

祐樹は魔力のコントロールがうまい。
悔しいが、ついていくので精一杯だ…

「いた！」

すぐに地上に降り立つ。

足場が安定したところに立つのはすごく楽だ。

「ヘレン！腕、また怪我したの！？大丈夫！？」

すぐさま駆け寄るが、祐樹ほど気の利いた言葉はかけれない。
言葉より先にヘレンの腕を治す。

祐樹はさっきから心配してばかりだ。

「怪我…ひどいね…」

「クランに助けられたのよ…」

それにはオレがびつくりした。

「すごいな…オレとは大違いだ……」

「そんなことないわ。私が変われたのは竜のおかげだもの。」
にこつとしたが、顔が引きつっているのが分かる。

「足、怪我してるじゃないか！」

すぐに治そうとする。

「ダメよ！」

え…びつくりした。こんなに拒否されるとは思わなかった。

「私の回復に魔力を使って、いざという時に使えなかったらどうするの！？」

「仲間を助けるほうが大切だ。」

きつぱりと言うと、おとなしくなった。

「こんなの擦り傷だから大丈夫なのに……」

絶対に嘘だ。足に青アザが出来ている。

表面だけを分解してもダメそうだ。

「ゴメン、足を全部を分解するからちょっと驚くかも…動かないでね。」

すぐにクランの足がなくなる。

「っきゃ……」

「大丈夫、竜を信じてっ！」

祐樹がいい所でフォローしてくれる。

足を形成する。うん、元通りだ。

「ありがとう…でも魔力が…」

「大丈夫だって。オレ魔力多いほうらしいからっ！」

「本当にありがとう。」

交互に2人から感謝される。

こういうときは祐樹は決まってすねるんだよねあ…

立場的に苦しくなる…

「竜、この辺の薔薇も無くなったことだし、配属場所に戻らないと。」

「

「うん。行くか…」

そのとき、嫌な悪寒がした。

「どうしたの？」

「来る…」

「どうしたの竜？私たちもう大丈夫よ。」

2人とも首をかしげている。

「違う、何かが、来る！」

ばっばっばっ…

囲まれた。

「おやおや…感のいい子ねえ…」

どうやら修行で身に付いたのは魔力を察知することみたいだ。

みんなは気づかなかった…

「せっかくコイツらが行ったら女の子2人を料理してあげようと思

ったのに…」

「大丈夫よ。どうせみんな死ぬんだし。」

どうしようもできず、会話を聞くことしか出来なかった。

「さて、ここで4人消して、私たちも昇格ね。」

何が起きてるんだ…

「めんどくさいから…抵抗しないでね。」

冗談じゃない…ユニオンが5体なんて…

絶体絶命（後書き）

最期まで読んでくださり、有難うございました。
竜たちは5体ものユニオンを倒せるのでしょうか？
次回をお楽しみに。

消滅

恐怖を通り過ぎると、笑いがこみ上げてくると言うのは本当だ…

「竜、もう一度さっきのやるから気を引いてて。」

祐樹は勝つ気でいる…

「あら…足に魔力を溜めてるわねえ…また瞬間的にスピードをあげようとも考えているのかしら？」

何！？

「不思議そうね。私たちには死んだ同志たちの記憶が流れ込んでくるのよ。」

「祐樹…さっきのは無理そうだな…」

祐樹が悔しそうに頷く。

「もちろん私たちは戦闘の経験値が倍増されるわ。あなたたちが私たちを殺せば殺すほど、私たちは強くなるのよ。」

「祐樹！右だ！」

さっき祐樹の足元から木の尖ったものが突き出た。

とつさに祐樹は避けることが出来たが、ギリギリだ…

「お喋りはあまり好きじゃないのよ。」

「やれやれ…じゃあ殺しましょうか。」

「くっ…」

一斉にかかってきた。

克蘭とヘレンは身動きできずにいる。

「克蘭！ヘレン！一旦ギルドに戻れっ！」

鉄の柵を自分たちの周りに作る。

「い…いやよ…そんなの…あたしも戦うわっ！」

「私も…」

「僕たちに任せて！」

「上は、がら空きねっ！」

上から1体のユニオンが入ってきた。

「ぐ…」

今度は出口の無いドームを形成する。

「こんなもので防げるとでも思うつ！？」

他の5体は柵を壊して向かってくる。

1体のユニオンがドームを破壊しようと棘を放っている。

必死に魔力を注ぎ込んで強度を上げる。

「早く戻るんだ！」

「いやよっ！仲間を見捨てるなんて…」

「そうよっ！」

ユニオンは攻撃を続けている。

「いいから戻れ！」

なんと声を張り上げたのは祐樹だった。

そして、優しい口調で言った。

「ここは僕たちがなんとかするから、戻って。大丈夫、僕たちは死
なないから。」

「それならあなたたちも…」

「僕たちが戻ったら紅界が解けるからダメだ…」

そういうと、彼女たちの体が薄くなっていった。

「何で！？何でよクラン！？あたしはまだ戦うわ！」

「ヘレン！」

クランは強い口調で言った。

「ぐ…早く………」

もうドームも壊れそうだ…

「ほらほらあ！いつまでそうやってやってるつもりよっ！」

依然として攻撃は止まない。

「ここは任せるのよ。私たちがいても足手まといだわ…」

もう彼女たちの姿はほとんど見えない。

「ありがとう。信じてくれて…僕たちは絶対大丈夫だから…」

「絶対に…死なないでね…」

そういつて彼女たちは消えた。

「そろそろ限界だ…」

「あと少し絶えて！」

祐樹は足に魔力を溜めているようだ。

「ゴメン…もう…無理…」

ドームが壊れた。

同時に、祐樹が僕を抱えて飛ぶ。

「…助かつ…」

「助かってないわ。」

ドカンッ！

「うわっ！」

後ろから吹き飛ばされる。

直撃ではなかったが、痛い。

「敵は1人じゃないわよ。」

うつ…。

「ぐあっ…」

祐樹が後ろからムチで打たれた。

「祐樹っ！」

「2人、逃がしちゃったわね…あなたたちは…逃げないの？」

祐樹がふふつと笑う。

「お前たちなんかが相手で、逃げるわけないじゃん…」

ドカンッ！

今度はムチで周りの壊れたコンクリート類を投げつける…

オレは祐樹を抱えて下がった。

「口だけは達者なようね。」

火に油をそそいだようだ…

「どんな状況か分かっているのかしら？」

オレたちの前には5体が横一列に並んでいる。

「分かってるさ。オレたちが有利だってことだろ。」

オレは魔力がまだ結構残っている。

祐樹は…そうでもなさそうだ。

「その口、二度と叩けないようにしてやるわ。」

5体がオレたちの周りを囲む。

頼む……

「終わりね。さようなら。」

「死んでたまるか！」

辺りが静まり返った。

ずっと5体が消える……

何が起こったか分からない……

「……竜……何したの？」

「こんなに……」

「竜……？」

自分でも驚いた……

「体全体から魔力を放出したんだ……そしたら……」

「一瞬で消えた……」

たじろいでいる場合ではない。

「一旦、帰るぞ……」

オレは心の中深く入るゝと念じた。

消滅（後書き）

最後まで読んでくださり、有難うございました。

前回の最後という漢字、間違っていました。すいません。

これから戦闘続きます。どうぞこれからもよろしくお願いします。

作戦開始

「ローズフィリア様、報告します。」

どうやら機嫌の悪いところに来てしまったようだ。

「何よつ。今忙しいから早くしてよね。」

手に魔力を集中させている。

「ユニオンが6体やられました。」

怒りは最高潮に達した。

「ふざけんじやないわよ！」

魔力が乱れる。

「内、5体は他の仲間への意思伝達無しに消滅しました。」

「ったく…ユニオンのレベルは？」

魔力をもう一度収束させる。

「どれも2以下です。」

「ならいいわ。」

怒りがすうつと消えていく。

手を開くと、ポンツという音と共に黒い薔薇が咲いていた。

「兵隊は美しく散るためにあるものよ。」

悔しい…

「克蘭、どうして…」

やはり帰ってきてても悔やんでいるようだ。

「ああやってするしかなかったわ…」

「でも…」

「竜たちを信じるの！そんなことより報告よ！」

そつ、今できる、最善のことをしないと。

「アリス！祐樹たちが！」

事情を説明する前にアリスは動いていた。

「分かつてる！これは異常事態よ！」

異常……最悪な光景が頭をよぎる。

「今からBランク以上の術者の人で、手が空いてる人が、並行してクエストを受けれる人たちに応援に向かってもらおうわ！」

きつと……ベインたちの仕業ね……

加勢に行くまで、あの子達もつかどうか。

「もうこれはクエストではなく、世界を守るためよ！紅界は私が維持するから、みんなは思う存分暴れてきて頂戴！」

うおお！と、雄たけびを上げ、次々とみんな消えていく。

「久々にまともに力使えるよ。」

「エノは、ほとんど力使わねーからな。」

怪我をしている人もみんなお構いなしに消えていく。

「ヘアリー！祐樹が怪我してるんだ！治してくれ！」

「分かった！今行くわ。」

……！？

「祐樹、竜！？」

駆け寄ってくるクランとヘレン。

「あなたたち、無事だったの！？」

アリスも驚いている。

「当たり前だろ！……正直やばかったけど……」

自分の魔力がほとんど無いのが分かる。

「竜に助けられたんだ……」

祐樹の傷がどんどん治っていく。

「信じてよかったわ……」

目に涙を浮かべて言ってくれた。

「あなたたち、ユニオン5体に囲まれたんでしょ！？」

「よく分からないけど……相手が消えた……いや、今はそれどころじゃない！あとで説明するよ！」

オレも祐樹もすぐに行こうとする。

「待ちなさい！」

アリスが怒鳴った。

「あなたたちは命の重みを分かってない！今行つて死ぬつもり！？勇者にでもなるつもり！？せつかく助かった命なんだからもっと大切にしない！」

…オレたちはアリスと目をあわせることができない。

克蘭たちも、ただ見守っている。

「あなたたちは休んで。どうやって助かったかも知りたいしね。」
ふう…アリスが怒ると息苦しい…

ん？もやもやした感覚に浸る。

「私が話すわ。竜たちは部屋でゆっくり休んで。」

克蘭の目の色が変わっていくところが見えた。

「ヘレン、あなたもよ。私もすぐに行くから。」

ヘレンは頷き、素直に従う。相当疲れているのだろう。

戦闘が開始してから、丸一日くらいはたっている。

「克蘭、頼むよ。祐樹、体力回復してすぐに行くぞ。」

「うん。そうだね。」

魔力は、ほぼ空だ…少しでも多く回復せねば…

部屋へ戻ると、すぐにベッドに入った。

こういうときは決まって寝付けないんだが、今日はすぐに眠れた。目が覚めると、外は薄墨色になっていた。

「早く行かないと！」

祐樹を起こしに行ったら、ちょうど起きたところだった。

「魔力は回復した？」

「完全回復したぜ！」

ある程度は回復したが、完全ではない…

「僕、まだ半分くらいしか回復してないや…」

弱気になる祐樹。オレの言葉を真に受けたようだ。

「大丈夫だ！半分あれば戦える。」

祐樹の顔に笑顔が戻ってくる。

「うん！早く行こう！」

「行くぞ！」

<出る>と念じた。

「……というわけらしいわ。」

最後まで黙りこんで聞いていたアリス…

まったくの無表情なので、聞いているのかさえ分からない。

「……どうして…」

やっとアリスが口を開いた。

「ユニオンは…すべて消滅したのね？」

真剣そのものの目には迫力がこもっている。

「え…ええ。そうよ。」

そのとき祐樹は消えなかった。

しかし、敵は消滅した。ということとは……私はとんでもない逸材を
背負い込んだわね…

「……きつと、もう一度使おうとすると大変なことになるわ…」

「え？」

複雑な表情を浮かべる。

「今はまだいい…それよりも、あなたは早く休んで。」

一刻も早くとめない…」

「分かったわ。アリスもほどほどにね。」

多分無理よ…

クランは部屋へ走っていった。

「もう配属場所なんて無視だな…」

昨日の場所に帰ると、あちこちで戦闘が起こっていた。そして、敵の数も増えていた。

「昨日のやつもう一回やればっ？」

祐樹は楽しそうだ。

「あれは……怖い。」

祐樹の周りにクエスチョンマークが飛び交う。

「普通に戦うぞっ！」

敵を潰して回る。

「まったく…何匹いるんだよ…」

あきらかに敵の強さは強くなっているが、数が減ってない。

ユニオンはまったくくない。

合体しようとしなのはおかしい。

「なんだか踊らされてるような気がしない？」

ちやうどオレもそう思ったところだ。

そろそろよ。

もうすぐで薔薇の侵略が始まるわ。

「うふふ…」

薔薇の美しさを知らずに、破壊しつくそうとしているやつらに思い知らせてやるのよ。

美しいものには棘があることをねえ…

「ローちゃんご機嫌だねっ！」

珍しく自分の足で立っているキューブ。

「ローちゃんやめんかい。」

「だって今日ベインいないんだもん。」

頬を膨らましても通用しないんだからね。

「会話が成り立ってないわ…。ベインどこ行ったの？」

「笑顔が変だよ。ベインは知らない。」

愛想笑いなんか二度としてやんない。

「それより薔薇きれいだねっ！」

「あんたにも薔薇の素晴らしさが分かるなんてねえ！」

心からそう思った。

「血の色みたいで……」

え？

「ローちゃん頑張ってねえっ！」

笑顔の裏に何を隠してるの……

怖い子供だ……

「なんだ…？」

地響きがする。

「うわぁ！」

突如地割れが起こった。

祐樹とオレが別々に分かれる。

地面が次々とひび割れていく。

「こっちへ来い！」

まだ割れ目が広まってなかったため、飛び移ることが出来た。

「危なかったぁ…」

「なんか来るぞ！」

割れた地面から太いツルが何本も出てきた。

「走れ！」

言う前に体は動いていた。

必死に逃げる。

すぐ後ろから雪崩のように押しかけてくる…
追いつかれる。

「おい！新人！」

オレたちの体がふわりと宙に浮く。

「何やってるんだよ。」

上を見上げるとエノがいた。

「あれ…何？」

「僕が知るもんか。」

風の力を使っているのか、3人とも上からツルの雪崩を見下ろす。

「はめられたんだな…」

自分の不覚を責める。

「ねえエノ、これってどれくらいもつ？」

祐樹が指を回転させながら聞く。

「ずっと。」

は？

「魔力は？」

「無限。」

！？

「ええ！？じゃあ絶対負けないじゃん！？」

エノが呆れて首を左右に振る。

「冗談が通じないの？それに魔力があっても負けることはあるんだよ。」

こんな自分よりも小さい子に馬鹿にされるとは…
おっ。

「動きが止まったね。」

ツルはビルくらいの高さまで積もっていた。
周りを見渡すと、みんな空中に浮いている。

中にはツルに飲み込まれて、助けってくれと叫んでいる人もいるが…

「これ…どうすんの？」

「どうしようもない。」

エノは腕を組んで考え込んでいる。
考えがまとまるまでこのままだな…
紅黒い空は開幕を告げているようだった。

作戦開始（後書き）

最後まで読んでくださって有難うございました。
なんだか書いていていろいろとネタがつきそうな気がします。
これからもよろしく願います。

弱さ

このイバラのようなツルは危なくないのか？

急に動き出したりしないだろうな…

「下…降りてみる？」

「いや、危な…おいっ！」

エノはオレたちの体を下ろそうとする。

「下降りないと何にも出来ないだろう。」

「でも……つぎやつ！」

落とすつもりか…このクソガキめ…

「大丈夫、落としたりしないよ。その代わり、おとなしい祐樹を見習いたまえ。」

くっそお…

「見習いたまええ！」

く…怒り増加…

「祐樹い！お前なあ…」

「来る！」

エノに会話をさえぎられる。3連続でオレの言葉を…

「御機嫌よう。みなさん。」

また…ベインか…前よりも魔力が小さい。

「さ、よ、う、な、ら！」

エノはベインを無視し、高密度のエネルギーを放った。

ベインの体を通り抜ける。

「何！？」

「おやおや、殺気立ってますねえ…」

見下した言い方は変わらない。

「しかし出てきたとたんに攻撃するのは無礼ではな…」

「それっ！」

祐樹も攻撃を仕掛ける。

「そんなに殺されたいか？」

背筋が凍るような目つきだ…

「ここにいる私はビジョンだ。全国にいる術者の皆に話しかけている。私の仲間が、第一段階の作戦を成功させてくれたから出向いた、というところだ。」

「どういうことだ？」

エノは顔色を変えずに、ベインを見つめつけている。

「第二段階の作戦を実行しに来た、と言っておこう。」

エノは理解しているのだろうか。無論オレたちは理解不能だ。

「竜はどういう意味が分かる？」

「わかんね…」

あのビジョンからは何も魔力は感じない。

「でははじめようか。生きてまた会えることを祈っているよ。」
心にも無いことを……

ベインが両手を合わせて組む。

「ナイトメア悪夢の始まり…発動。」

世界が歪み始める…世界が崩れた……

崩れる瞬間に目に入ったベインは、陽気に手を振っていた。

世界が変わった…ここはどこだ？

長方形の部屋一面に、白と黒のチェックの模様が付いている。

「気持ち悪い……」

「そうかい？いい部屋だと思うんだがな。」

驚いた…白と黒の床から、まるで下から何かで押されたかのように人が出てきた。

「誰だ？」

「俺は………お前だよ！」

こちらへ手のひらを見せる。

な…に？

オレの腕が……消えた……

いや、この感覚は原子になった……？

「ぐ…」

必死に腕をかき集め、元に戻す。

「お前は…誰だ!？」

「だから俺はお前だつて。」

「ベイン!お帰りっ!」

「ああ、ただいま。」

ふう〜と、椅子に深く腰掛ける。

「どうしたの?元氣ないよ?」

「いや、さすがに千幾つもの部屋を作るのは疲れるよ…」
ははつと笑って見せる。

「少し休ませてくれよ。」

「はあ〜い!」

ベインの上から飛び降りると、滅茶苦茶な向きに作られたドアを開けて入っていく。

ホントに無邪気な子供だ。

そして素直でいい子。

私は疲れてなどいないよ。

ただ…あの程度の術では100人程度しか死なないと思うが…もしかしたらもつと死ぬかもしれない。

なんせ自分の弱さと戦うのは、心身ともに追いやられるからな。

その弱さに打ち勝つ方法は2つしかない…そんなあいつらが哀れすぎて、内面的に疲れた…

まあ何人かには特別なやつと戦わせているんだがな。

「何人残るか…見届けさせてもらうぞ。」

くっそ…

敵は原子を巧みに操り、攻撃を続ける。

「オレは、お前が誰だっけ聞いてるんだ！」

攻撃が当たる……止まった？

「だから何度も言わせるなよ。俺はお前だ。」

はあ…とため息をついて、首を左右に振る。

「オレはお前みたいなチエツクな模様じゃないぞ…」

「見掛けで人を判断しちゃだめだっけ。俺はお前の弱さの塊。」

弱さの塊…？

そんなふざけた話が通用するものか。

「この部屋、なんて言うか知ってる？」

「ナイトメアだろ？」

オレは何でこんなやつと話しているのだろう…

「そう、悪夢だ。もっとも自分の嫌なものと戦うんだよお！」

急に不意打ちを仕掛けてくる。形成までの時間の短縮を修行でやつ

たため、なんとか防げた。

「お前が一番嫌いなもの……それは自分の弱さだろ？」

なぜ…なぜ知ってる？

「そおらよっ！」

「うぐっ……」

後ろから陶器で殴られた感覚がする…

背中に直撃だ…

なんで…お前はオレの目の前に居ただろう…

「ほらな。まだ力を完璧に自分のものにしていない。お前は弱い。」

くう……倒れたままで歯を食いしばる。

「いつもいつも祐樹に助けられている。そんなんだからザコなんだよ。」

お前……ぜってえ許さねえ…

消してやる…体全体に力を溜める。

「使うのか？お前は一度使って分かっているだろう？大切な何かが無くなってもいいのか？」

あ……

体から力がすうっと引いていくのが分かる。

俺がにやりとする…

「その程度の覚悟で使おうとしてんじゃねえよ。」

「ぐはっ……」

腹を蹴られる。

口から血が飛び散る。

「死ねよ。俺がお前になってやるからよお。」

肩を鉄のガントレットをはめた手で殴られる。

もう左肩は使えない…

あんな使い方が出来るんだな……

「よわっちいねえ…こんなんで生き残れたのは奇跡だ。」

「ぐ…がはっ…」

襟をつかまれて上に持ち上げられる。

「オレが、生き残れたのが、奇跡だとしても……これから強く、なりや…いいだろ。」

「お前に出来るのか？」

黒い目がオレを凝視する。

「ああ……なれなくても、なってやるさ…」

にらみ返す…

「なれなかったら殺すぞ。」

「喜んで殺されるさ…」

フンと言ってオレを放した。

いってえ…落とすなよ…

「俺だってお前が消えれば消える。初めから殺すつもりなんかねえよ。」

オレは、すぐさま傷を癒す。

「俺を説き伏せたお前に、いいことを教えてやろう。」

俺の体が消えていく。

「この部屋に入ったものが出る方法は2つだ。敵を説き伏せるか、力ずくで跪かせる。」

「オレにはもう、関係ないだろ。」

邪心がにやりとする。

「果たしてホントにそうかな…？」
「なんで？」

「あばよ。」

「ちよつと待て！」

消えてしまった。と同時にこの世界が崩れる…

気が付くと、外にいた。

「竜！？」

祐樹じゃないか。

「よかった！なんかみんな消えちゃったんだけど…」

「何！？」

じゃあ何でお前は平気なんだ…

「どうしてみんないなくなっちゃったんだろう…」

「まさか！？」

…みんな戦っているのか…？

ここどこだよ。

「気味悪いなあ。」

辺り一面に黒い薔薇が咲いている。

「気味が悪い？」

エノの後ろには変化した薔薇がいた。

「ああ、お前のようにな。」

「そんなこと二度と言えなくなるわよ。」

周りの薔薇が一斉に変化し始めた。

「雑魚がどんなに集まっても雑魚なんだよ。」

「残念だけどその言葉、あとで撤回しなきゃならなくなるわよ。」

薔薇が一体に絡みつき始めた。

クネクネとした動きが気持ち悪い。

やがて、一つの人型が出来た：魔力はさっきまでのとは桁違いだ。

「これを見てもまだ雑魚って言える？」

「確かに魔力は普通のユニオンより高いね。」

「私はレベル3だからねえ。融合したやつらの強さと、経験値によって変わるけど。」

僕にとっては、大して変わりないというのに。

「ねえ、ここって君と僕しかいないの？」

「直に私だけになるけどねえ。」

エノがくすくすと笑った。

「君、ラッキーだねえ。誰にも見られてないなら、僕の術見せてあげるよ。」

「そう、使う前に死ぬんじゃない？」

エノは無視した。

ユニオンはムツとする。

「それは、異の術かしら？」

「違うね。水と風を同時に使うんだ。」

右手に風、左手に水の属性を、魔力をコントロールして放出させている。

空気がピリピリする。

「そんなことできるわけないでしょ。」

「不可能を可能にしたから氷の術が使えるようになったんだよ。」

ふふつと笑って両手を合わせる。

「死ねよ。一瞬の寒」
アイスモーメント

両手をほどき、魔力を地面に手をつけて放つ。

地面が凍っていく…

「な…何よこれ!？」

ユニオンの足は氷となり、動けなくなっていた。

「大丈夫だ。寒いのは一瞬だけだからな。」

「やめなさいよっ!」

股、腹、胸、首と、順に凍っていく。

「前言撤回はならなかったよ。所詮雑魚は雑魚だ。」

「きゃあああああ!」

頭まで氷となったユニオンは、二度と叫ぶことはない。

エノの手には氷の刀が握られていた。氷刀とでも言うのか？

その柄の部分で凍ったユニオンを殴りつける。

「さようなら。」

氷塊は粉々に砕け去った。

弱さ（後書き）

読んでいただいて、有難うございました。

神龍

ふつとエノが現れた。

「エノ！？大丈夫だったか！？」

「僕があんなのに負けるわけがないじゃないか。」
状況が読めない祐樹。

「2人とも何があつたの？」

話してやると、不思議そうな表情を浮かべた。

「なんで僕だけ？」

「だから今考えてるの。」

エノが反応した。

「いろんなところで魔力が戻ってきている。みんな傷は負っているが、死んでいない。」

よかつたと、胸をなでおろす。

「エノって魔力の察知がうまいんだね。」

「まあな。」

軽くかわした…

「ふふふ……君たち、ちゃんと生きているじゃないか。」

またベインが現れる。

「さっきのは、何が目的だ！？」

「おや？みんな帰ってきましたか…100人ほど死んでくださると思つたのですが…」

く……質問無視か…

「まあいいでしょう。私の役目は終わりました。では…」
消えた…

何しに来たんだベインは…

「遠いところに大きな魔力が9つ……」

「ここにも1つ」

「な！？」

後ろには知らないやつがいた。

でも……敵ってことは分かる。

「オレはクリア。お前たちを消すものだ。」

「クリア……だと……？」

エノの表情が一変した。

「どうしたの？」

「クリア……別名、キャントシー……見ることができないやつだ。」

「よく知ってるじゃないか」

あれ？

消えた…

「正確には、見ることができないだけじゃなく、魔力を消したりすることも出来るんだがな。」

「うわぁっ」

祐樹が吹っ飛ぶ。

「おい、お前ら下がってるっ！」

「そうだ。オレはお前にしか用ねえからな。」

エノに向かって攻撃を仕掛ける。

敵が見えないのでは困る…

「祐樹、大丈夫か？」

傷を治療する。

「うん……」

頭を殴られたのか、意識が朦朧としている。

「そっぴやさ、何で僕たち普通に空中にいられるの？」

「知らないよ。」

多少意識がしっかりしてきたようだ。

多分、空中にいられるのはエノのおかげだろう。

戦闘をしながらこちらにも気を配っている…

「祐樹、下に下りるぞ。」

今できる最善の余地はこれしかない。

「エノ、頑張ってくれ…」

「あいつら、なかなか利口じゃないか。」

「ああ、そうだな。」

く……敵が見えないのが、こんなにも辛いとは…
仕方ない。

右手に風、左手に水を…

「食らえ、一瞬の寒。」
アイスモーメント

前とは違い、天候が変化する…

吹雪になつてきた。

「おい、お前知ってるか。」

「何がだ？」

見えない相手に向かって話しかける。

「さっきの部屋だ。あれは単に、お前らの仲間を消そうとしてした
ものではない。」

「だったら何だつて言うんだ？」

笑い声が聞こえる…

「消そうとして作った部屋もあるだろうな。しかし、別の意味もあ
った。」

なぜコイツは冷氣の中、こんなに落ち着いていられるのか…

「それは、相手の術を見るためでもあったんだ。」

「そうかそうか。でもここまで荒れた天候を、どうにかできるもの
か？」

吹雪はうなり声を上げ、吹き荒れる。

「もう一つ問おう。オレのナンバーを知っているか？」

「8だろ。その程度で僕をたおそうなんて無理だよ。」

「ナンバーなんて飾りなんだよ。ただオレは8が好きただけだ…」
よし、思ったとおり。

話しているうちに冷氣で相手の姿が見えてきた。

光で屈折させて、見えなくしていただけだったのだ。

クリアは気づいていない…

「オレの力、教えてやろう」

「その前に死ぬよ！」

ねじれた氷柱が、相手に突き刺さる。

「氷柱の集合点！」
アンシルゲイザー

敵は消え去った。

「所詮はNO8だ。」

「人の話は最後まで聞こうぜ。」

何！？

「ぐあ……」

腹に無数の穴があく……

「オレは煙にもなれるんだ。どちらにせよ、見えないがな。」

くう……さつきはわざと見えるようにしたのか……

「じゃあな。」

手に火を集め、拳を作って殴りかっってきた。

死んだな……

「何！？」

瞑っていた目を開けた……

「悪い、遅くなって。風操の難しかったんだ。祐樹は風使えない

から下にいるよ。」

そこには竜がいた。

「……お前……死ぬぞ？」

「かまわない。決めたんだ、約束したんだ。あいつと……」

どんなことがあっても、守ってみせると。

もしあの力を使って、大変なことが起きても、なんとかなるさ。

出来る限り使いたくなかったんだけどなあ……

「消えろっ！クリア！」

体中から一気に魔力を放つ。

「ぐ……なんだ……お前……は……」

クリアが本当に消えた……

「お前……その力は……」

ベインは一瞬たじろいだが、すぐに元に戻る…

「その程度の男だったと言うことだ。」

「ローズフィリア、スパル、キューブ、ロザリオ、レイジ、フェニックス、ウロ、ロデフ。みんな、ついてきてくれるか？」
みな頷く。

「では行くでしょう。我が進化を持って、新世界へ。」

ばっ…

目覚めが悪い…

嫌な予感がする。

即行で着替え、アリスの下へ行く。

「アリス、ヘレンは？」

「先に行ったわ…それより、まずいことになってる…」

「私も行くわ！」

「待ちなさい！」

この頃のアリスは怖い…

「今行くと危険だわ。おさまってからにして…お願い。」

深刻な表情だ…

それほどまでにまずいことが起きているの？

「何が起きてるの？」

「ベインが近頃、頻繁に動き出したのは、これを狙ってたのね…」
聞いているのか？

「私が止めないと、私が…絶対に。」

いや、聞いてないだろう。

外では何が起こってるの？

空は、死んでいた。

神龍（後書き）

最後まで読んでくださり、有難うございました。
これから、入試なので更新が遅れるかもしれませんが、
すいません。
これからもどうかよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5511d/>

地球上の異世界

2010年10月11日03時04分発行